消費を対象とした日本経済史研究の視座にかかわる若干の考察

── ヴェブレンとボードリヤールを参照軸としながら ──

河　村　徳　士

は じ め に

本稿の課題は，ヴェブレンの『有閑階級の理論』とボードリヤールの『消費社会の神話と構造』を手がかりとしながら，日本経済史の分野で近年さかんに進められている消費を対象とした研究の意義と今後の課題をさぐることである。日本経済史の分野が，生産力の発展あるいは成長の要因を解き明かすことに注力したためか，個人消費のあり方や家計を対象とした研究が主流を形成したことは少なかった(1)。ただし，こうした課題設定は，時代の全体像を把握するためには，消費以外の要素を説明することが重要であったからと言い換えることもできる。時代の全体像把握というとやや漠としているが，一国単位を対象とした資本主義の成立とその変質を主な課題としたといってもよい。こうした課題に照らしたとき，消費が対象として重要性を増すのは，やはり国内市場の発展を前提とした産業が，経済成長をけん引し始め，その後に基軸化し，日本社会全体に影響を及ぼすようになった時代であろう。1955 年から 1973 年にかけての高度成長期，その後，1985 年のプラザ合意あたりまでを想定できる安定成長期，バブル経済の形成とその崩壊の後から現在までの長期不況期がそのような時代に適合的であろう(2)。もちろん，これらの時代に国内外需要の双方において消費が重要性を増したとはいえ，一貫して同じ視点でとらえることには，まだまだ実証的な見解が不十分であるし慎重になる必要がある。ただし，それぞれの時期を分析するためにも消費を対象とする何らかの方法的な見方の検討は欠かせない作業とも考えられる。ここでは高度成長期あたりから水面下で育まれ，安定成長期以降に台頭し始めたと想定できる個性的な消費の登場を念頭におきながら，消費をめぐる議論から論点を導き出し，新しい時代を対象とした日本経済史分析に必要な視点を考察することとしたい(3)。

1. ヴェブレン『有閑階級の理論』における閑暇・消費の意義と限界

1-1. 有閑階級の特徴と見栄を競うこと

ヴェブレンは『有閑階級の理論』において消費を次のようにとらえた。やや広い視点で歴史的な関心に基づいた分析も行われており，有閑階級の出現は，私有財産制の始期とときを同じくすることが必然であるという(4)。有閑階級は，野蛮文化あるいは原始未開段階の時代に登場することはなく，封建制の時代に隆盛をみせ，資本主義社会に移行したのちも社会に君臨する。こうした有閑階級は，生産的な労働から免除されていることが，ヴェブレンの議論においては重要であった。そうした意味ではある程度の生産力の発展がなければ，彼らは存立し得ない。有閑階級は，生産的な労働から免れているがゆえに，第一に閑暇であることと，第二に金銭的な浪費をなし得ることを主な特徴とする(5)。前者は時間の浪費ともとらえることができる。そのほか，近代社会に及んでも，過去の有閑階級の価値観が名残として残存しており，略奪的な性格から好戦的であること，スポーツを好むこと，学問は宗教的な行為が代行的な閑暇として重視され発展をみたことなど，独特な特徴を生み出したことが論じられるが，ここでは時間的な浪費と消費の二点に注目しよう。

有閑階級の行為のうち，閑暇は，生産的な労働を免除され，労働を忌避する価値観を基礎としながら成り立っており，本人が時間を浪費できることだけではなく，代行的閑暇などと指摘されるように家族や召使いがそうした状態にあることも現象としてはあり得る(6)。代行的閑暇は，具体的に漠として無為に時間を過ごすのでは必ずしもなく，礼儀作法の体得といった言わば無駄な時間をかけた行為を可能にしていることによって表現される。また金銭的な浪費も生産的な労働に従事する必要がなくそれだけ所得にゆとりがあることが要件となっている(7)。こちらも同様に有閑階級の主人のみならず家族や召使いが金銭的な浪費を実現することも含まれる。

こうした有閑階級の行為は，次第に所得が乏しくゆとりのない人々にも波及し，彼らは自分より少し上位の階層の暮らしに憧憬を抱かざるを得なくなるという。この現象はとりわけ近代社会以降に現れてくる事態のようである。次の記述からうかがえるだろう(8)。

> 中産階級なり，下層階級なりの家庭によっていとなまれるこのような代行的消費は，有閑階級の生活様式の直接の発現と考えるわけにはゆかない。けだし，このような金銭上の等級の家庭は，有閑階級のなかにははいらないからである。むしろ，ここでは，有閑階級の生活様式は，第二次的な距離で表現されるということになる。有閑階級は，名声という点で，社会構造の首位に立っている。だから，その生活様式なり，価値の標準なりは，その社会の名声

の規範をあたえる。ある程度それに近づくように，この標準をまもることは，低い階梯のあらゆる階級が，しなければならない義務となる。近代の文明国では，諸社会階級のあいだの境界線は，不明確で変わりやすいものとなった。そして，このようなことがおこるばあいには，上層階級によって課せられる名声の規範は，ほとんどなんらの障害なしに，社会構造全体を通じて最低の階層にいたるまで，その強制的な影響力をおよぼす。その結果は，各階層の成員は，そのつぎの上位の階層におこなわれている生活様式を，見苦しくない生活の理想としてうけとり，その理想にかなった生活をおくるようにつとめるということになる。かれらは，うまくゆかなかったばあいには，その世間的名声と自尊心を失うおそれがあるために，少なくとも上べだけでも，世間一般の基準をまもらねばならないのである。

すなわち，自分より上位の生活習慣を追いかけ続けることは，義務と課してしまう。

そのうえで，ヴェブレンの議論における重要な前提の一つは，見せびらかし消費，金銭的浪費などという表現にあらわれているように，いつのまにか有閑階級は見栄を張り続けることを体得しているということである[(9)]。こうした見栄に基づいて有閑階級的な行為が選択され続けることになるのであり，言い換えれば同階級のなかで体面を維持する，メンツを保つために消費が義務化される。繰り返しではあるが，重要なことは見栄を張ることによって，金銭的な浪費を続けることである ── もちろん閑暇状態をアピールすることも同じ動機に基づいているのだろう ──。ヴェブレンの言葉を借りれば，消費を増やす方法がありながら控える人は「けちという卑しむべき動機がおしつけられ」てしまい，反対に，「その刺激に直ちに反応することは，正常な結果としてうけいれられる」という[(10)]。そして見栄について次のように指摘している。

このことは多くのばあい，われわれの努力の指導となるような支出の標準は，すでになしとげられた平凡で普通な支出ではなく，われわれがちょっと手が届かないような消費，または，それに達するためには，なにかの無理をしなければならないような消費の理想である，ということを意味する。その動機は見栄を競うこと ── われわれが，自分たちをそれと同じ部類と考える習慣となっているひとたちを追い越そうという気持ちをおこさせる差別的な比較の刺激 ── である。

このような見栄の性向は，ヴェブレンの議論においては人間性の特徴でもあることを確認しておこう。次のようである[(11)]。

生活程度を形づくる若干の習慣の相対的なねばり強さを決定するばあいに，このような性向

の要素が演ずる役割は，ひとびとが衒示的消費の点での習慣的な支出を断念するのを極端にいやがることを説明するのに役立つ。この種の習慣の基礎として，それとむすびつけて考うべき性癖や性向は，それを発揮することが見栄にふくまれるような性癖である。そして見栄の――差別的な比較の――性向は，古くから成長したものであり，広くゆきわたった人間性の特徴である。それは容易に，あらゆる新しい形の力強い活動のなかにひきいれられるものであり，またそれは，ひとたび習慣的な表現に達したばあいには，いかなる形態によってもきわめて力強く自己を主張する。

見栄を競うことは，「広くゆきわたった人間性の特徴」として生きる動機づけになってきたと論じられていることがうかがえると思われる。

そのうえで，確認しておくべきことは，見栄を競うことを動機づけとして閑暇や金銭的な浪費が行われていることであり，とりわけ後者の浪費については，上位階級に追い付こうとする行為でもあることである。この点は，さきほど指摘したとおりであるが，もう少し別の角度からも確認しておきたい。すなわち，同じような指摘は，ヴェブレンの議論において必ずしも明示的ではないのであるが，金銭的な浪費という行為自体が，財やサービスの価値を決定するという論理展開において垣間見ることができる(12)。浪費が財やサービスの価値を決定するということは，美術品は美しいから価値がある，あるいはある財は使いやすいから重宝される，といったことではなく，高価であるからないしは浪費の対象であるから意味があるというものである。「その美しさのために価値があると考えられる品物の効用は，その品物の値段が高いということと，密接に関連している」と指摘されるとおりである(13)。

この点は，衣服の消費に典型的にあらわれるという。衣服の場合は，常にあらゆる観察者の目につくものであるから，衒示的浪費が効果的に役立つというわけである。次のとおりである(14)。

衣服については，他のいかなる方面の消費よりも，衒示のための公認の支出がずっとはっきりとあらわれており，またおそらく，ずっと一般的におこなわれているといってよいであろう。あらゆる階級が服装のためにまねく金銭的支出の大部分は，身体の保護のためよりも，むしろ尊敬されるような外観のためにおこなうものであるという常識に同意することは，なにびとにとっても少しも困難ではなかろう。

繰り返し確認しておけば，衣服の消費においても金銭的な浪費が重要であるから，高価であることが消費行為を方向付ける。すなわち，「衒示的浪費の規範は，衣服にかんするすべての点で，制約的な監視をおよぼすものであり，したがって流行の変化は，すべて浪費の要求に合致しなけ

ればならない」のである[15]。流行などのスタイルの変化は，「われわれの美の感覚にうったえるものをえようとするたえざる探求の表現」でもあるのだが，しかし，結局，重要なことは，「あらゆる新機軸は，衒示的浪費の規範の淘汰的な作用をうけながら，新機軸がおこりうる範囲はいくぶん制限される。新機軸は，それが排除するものよりもいっそう美しく，また，しばしば，いっそう気にさわらないようなものでなくてはならないばかりでなく，またそれは高価であるという公認の標準にも合致しなければならない」こととなる[16]。新しいスタイルを打ち出すような新機軸は，新規性やデザイン性という価値観だけで成り立つものではなく，高価であることも求められるわけである。

このように，見栄を競うことに基づいた金銭的な浪費は，高価であることが大切であって，こうした消費行為は，有閑階級を特徴づける重要な論点であった。なおかつ近代社会においては，下位の所得階層に位置づく人々にもこのような習慣が浸透し，より上位の階層に追いつくために少しでも高価な財やサービスを絶えず消費することが義務化されていった。とりわけ金銭的な浪費が高価な対象物を求め，そうした価値観によって高価であることが美的でありかつ機能的でさえあることが可能性として提示されていることは，ヴェブレンの独特な論理展開であった。ヴェブレンにとって，高価であることを最重要とする消費習慣は，美的合理性，技術的合理性，あるいは職人的合理性の判断を歪めるものでさえあったのである[17]。こうした論点，すなわち高価であることが最重要であるという消費習慣を指摘する議論は，のちにボードリヤールと比較するうえで大切な論点となる。

1-2. 閑暇と製作本能の衝突

一方，有閑階級の特徴を示すもう一つの習慣であった閑暇な状態をみせつける行為は，ヴェブレンの議論においてどのような変遷をたどるのであろうか。この行為は，近代社会においても，主婦や子供を通じて代行的に誇示される場合があるものの[18]，次のように議論されていることも重要である。

すなわち，消費を増殖させ続けるというよりかは，一方の閑暇な状態を見せびらかす行為は，次第に後景に追いやられると議論しているように一面では読めるということである。ヴェブレンの語りによれば，「閑暇は，その後，経済発展がすすみ，その社会の規模が大きくなるとともにしだいに足場を失い，すたれるとおもわれるかもしれない」とされ，実際，「閑暇は，最初は第一位をたもち，半平和文化の時代には，富の直接の指標としても，見苦しくない生活の標準の要素としても，財貨の浪費的消費をはるかにしのぐ地位をもつようになった。その時点以後には，消費が勢力をまし，ついには現在，問題なく首位をしめるようになった」という[19]。つまり，閑暇は生産的な労働からの免除を示すものとして，名誉あることであったが，時代が下るにつれ

て，富を蓄えた特別な有閑階級であることを誇示する方法としては，金銭的な浪費が重宝されるに至ったとされる。もっとも，他方で女性の労働免除によって代行的閑暇が見せびらかしの手段となっていることは否定していないので[20]，閑暇が手段として喪失したわけではないのであるが，最重要な見せびらかしの方法とは言い切っていないと考えられる点が重要である。

そのうえで，次の点にとりわけ注意する必要がある。すなわち，手段としての閑暇の意義が低下するという論理展開を構築するにあたって，重要な概念が提示されており，それは，これまたヴェブレンの独特なアイデアに基づいた製作本能という議論である。閑暇の効用が低下したことについて次のように論じ製作本能の議論が展開されている[21]。

> その後，名声の基礎としての衒示的閑暇の効用が相対的に低下したことは，ひとつには，富の証拠としての消費の相対的効果が増加したことによるものであるが，しかし，それは，またひとつには，衒示的浪費の習慣とは異なり，またある程度それと相反するもうひとつの他の力にもとめることができる。
> このような別の力というのは，製作本能（the instinct of workmanship）である。

続けて製作本能は次のように説明されている[22]。

> この本能は，他の事情がゆるすならば，ひとびとをして，生産的な能力や，人間の役に立つものはすべて，好意の目でみる気持ちをおこさせる。それはひとびとをして，物質なり労働なりの無駄を軽蔑する気持をもたせる。製作本能は，万人のなかにあるのであり，きわめて不都合な状況のもとでも，あらわれてくる。

みられるように，人間は製作本能を本来的に備えていることが指摘されているといえるだろう。

これらの引用から指摘できるヴェブレンの議論を拡張させる重要な可能性は，製作本能によって閑暇の価値が引き下げられたのではないかということである。とはいえ，製作本能はこの著書においてはやや唐突に登場する論点でもあった。製作本能は，ヴェブレンにおいてはどのように本能として措定され，また労働をめぐる議論といかなる関係にあるのか，これらの点について，若干，議論を敷衍しておけば次項のとおりである。

1-3. 製作本能と労働に対する評価

そもそも，閑暇と必要以上の消費が社会的な地位の顕示（みせびらかし）であって，それは私

有財産制の開始とともにそうであり，どちらが選択されるかはそのときの社会状況なり時代的な背景によるものとヴェブレンにおいては論じられていた。かかえている召使いなどが労働に従事し自分と家族は暇であることが富あるいは社会的な地位を顕示するものであって，この場合には労働から免除されていることが重要であった[23]。生活にかかわる労働，いいかえれば人間あるいは人間社会の再生産のための労働に従事することは，ネガティヴな評価だったことになる。こうした時代においては，閑暇と過剰な消費の双方が顕示のために選択されやすい。労働から免れた家族や召使いまでもが必要以上の物財で囲まれるわけである。

しかし，既述のように，近代社会以降，自由な経済活動が次第に展開されるにつれて，富を顕示するための手段として選ばれ続けてきた閑暇は，まったく消滅するわけではないものの，重要性を失っていった。その理由は，労働に対する考え方の変化にあったと読み取ることができる。ヴェブレンは，ここで製作本能という概念を創出し，確認してきたように，そもそも人間には製作におよぶ何らかの意欲が備わっているのではないかと論じた。その含意は，そもそも製作本能を生まれながらに身に着けていたはずの人類は，社会的な地位や富を顕示することに囚われ過ぎて労働に対する嫌悪感を過剰に抱き，閑暇であることを重視しすぎてきたと解釈することもできる。言い換えると，近代社会の到来とともに製作本能をわれわれは思い出したわけである。

この論点は重要である。すなわち，社会的な地位や富を顕示するための手段であった閑暇の重要性が後退し，もう一つの手段，つまり消費が近代社会では人々の心をこれまで以上に捉えていったと論理展開されているからである。継続的な消費に染まり行くわれわれの意識は，それまでの社会で展開された事態と大して変わらない。最も高い地位にあるとみなされる社会集団の消費が望ましい価値観として君臨し，かれらより影響力の高くない地位にある者は最上級を目標として，それ以外の者は同様に手の届きそうな少し上位の生活を望むというものであって，これは，前項で確認したように義務とまでヴェブレンは表現していた。

とはいえ，製作本能が暇閑の意義を減じる重要な論点ではあるものの，なぜ本能として人間に備わっているものなのか，『有閑階級の理論』においては，自明のこととされており，実証的な根拠がうかがえる論点では必ずしもない。この点について，宇沢弘文の解釈を踏まえればおそらく次のようなことであろう。宇沢によれば，『有閑階級の理論』が出版される前の 1898 年から 1899 年にかけてヴェブレンは三本の興味深い論文を発表しており，そのうちの「製作者気質の本能と労働の煩わしさ」（“The Instinct of Workmanship and the Irksomeness of Labour”）において，製作本能は人間の本来的な性向であって生きることと同義に扱われている概念として提示されているという[24]。その理由は，動物を例にとれば，どの種についても，その種を維持し守ってゆく活動が備わっていないと，種自体の存続が難しくなってしまうことから，人間の場合も同様であって，「自然淘汰を避けるために，人間はつくることに対して本能的性向をもってい

る」というのである[25]。種を保存するために個人あるいは人間社会の再生産を目的とした本能が備わっていたとしても，確かに不自然ではないのかもしれない。

それでは，こうした製作本能に基づいた労働については，どのような捉え方がなされてきたのだろうか。試論的に論じておけば，ヴェーバーの独特な議論を除いて，多くの経済学者は，人間がすすんで労働に従事することを必ずしも認めてこなかったと思われる。経済学を生んだアダム・スミスは，自然価格を形成する労働の価値を説明するにあたって「労苦と骨折り」と表現したように，労働に対して出来れば回避したいという人々の心情をくみとった議論を展開した[26]。すなわち，やや労働に対して苦痛を伴う捉え方をした。マルクスは，ある意味ではさらに徹底し，労働力の商品化を通じて，労働自体がよそよそしい社会行為に変質してしまったことを重視した[27]。いわば商品として人々は機能的に結びつき，主観的な意識を超えて生きる意味を形骸化させてしまってゆくのであった[28]。労働疎外などと表現される事態の始まりである。同じではないが，ミクロ経済学などにおいても，労働という苦痛の対価として賃金が得られるという説明をしている限りでは，労働に対する考え方は同様であった[29]。こうした意味ではヴェブレンの見方は個性的な議論であった。既述したように，製作本能の開花は，労働を苦痛とみなすというとらえ方自体が古代社会から連綿として歴史的に形成されたことを示唆するからである。

これに対して，製作本能に基づいた労働という論点について，現世において職務を合理的に遂行し始めた近代人のあり方を，宗教に裏打ちされたエートスでもって説明したマックス・ヴェーバーの議論と照らし合わせるとどのように位置づけられるのだろうか。ヴェーバーは，利潤を恒常的にかつ主体的に獲得する行為が，なぜ一部のヨーロッパ社会に出現したのかという問いをたてて資本主義の発生する背景を，生産力の発展といういささか自明の論理設定ではなく，人びとをつき動かすエートスの形成さらにはそれを促す宗教倫理に求めた[30]。宗教倫理とそれに基づいた行為の選択肢の限定性に関する詳細をいまおくとすれば，営利を求める行為は，欲望の礼賛ではなくて，むしろそれを否定し勤勉であることが重要であったとし，勤勉の目的は現世において使命をまっとうし救済を求めることにあって，どちらかといえば企業家の精神に近いような議論を展開した[31]。こうした人々によって営まれる生産組織は合理的であることが徹底され職業倫理を勤勉に追及することが重要であって，そこでの労働もおそらく同様の価値観が求められたであろう。そして，その意図せざる結果として利潤が発生し，しかもそれは浪費されることはなく再投資され，これも意図せざる結果として生産性の上昇なり生産力の発展が伴うものであった。そして，労働強化を自らの使命として強いてしまった近代人は，ある意味では働き過ぎとでも呼べるような過剰な合理性を追求する製作者となり果ててしまい，なおかつ近代社会がある種の機能性重視とでも呼べる性格をもっていたがゆえに，現世において職業倫理を発揮していく新しい時代に対して，ヴェーバーは悲観的な見通しを抱いていた[32]。

このように，ヴェブレンとヴェーバーは，何らかの対象に働きかける行為は，本能的にとりくむ性質をもつこと，近代社会の夜明けにおいては職業倫理として自発的に選択され勤勉にとりくむものであることといった点を論じた限りでは，経済学が労働を苦痛とみなしたことと対比できる同じような地平に立っていた。すなわち，労働に対する忌避感をやや後景においやり，労働一般として限りなくあらゆる者が働く社会の到来を象徴していた点では共通項をもっていた可能性がうかがえる。とはいえ，両者には相違点もあった。ヴェーバーの場合は，悲観的な見通しを抱いていたうえに，人間性の特徴ではなく，近代社会の特徴として論じていた。すなわち，ヴェーバーは，人間性の特徴かどうかはさておき近代社会に新しく労働強化を強いるような使命としての職業倫理あるいは労働が生まれたということになる。もちろん，近代社会の特徴という論理においても，ヴェーバーのようなエートス論自体が目覚まし時計の役割をはたして，製作本能という眠れる子供をたたき起こしたという解釈ができる限りでは，引き続き同様な論点として共通項を探ることもできるかもしれないが，次の点を考えることが重要である。すなわち，ヴェブレンは，製作本能が発揮される労働過程の成果物に対しても独特な議論を展開しており，製作本能は，衒示的閑暇の効用を低下させただけではなく―繰り返しではあるが，ヴェブレンは衒示的閑暇が近代社会において喪失するとは考えていない―，衒示的浪費とも対立し得る概念として提示されていたことである。言い換えると，財やサービスを生み出す単なる労働とは，製作本能が異なる行為の源泉であることが示唆されているのである。項を改めて考察しよう(33)。

1-4. 浪費と製作本能の衝突

製作本能は，先の引用からもうかがえるように，ある種の製作者にとっての合理性を優先させる力でもあることが示唆される。別の場所においても，ヴェブレンは次のように指摘している(34)。

> 製作本能は，それが衒示的浪費の法則と衝突するかぎり，実質的効果を強調する気持よりも，むしろ，明らかに無駄なものは，いとわしいものであり，美しいはずはないという不変の感覚となってあらわれる。それはもともと本能的好意の性質のものであるから，この本能の指導は，主として，また直接には，その要求に明白に違反するものに及ぼされる。

衒示的浪費と製作本能が衝突するというのである。製作本能は，一面では，製作することそれ自体に意味を見出す労働のように解釈できるが，他面では，ヴェブレンは，社会的有用性，言い換えると使用価値を重視した方向に向けられた労働過程を指しているようでもある。そのことは，衒示的浪費という自身が創造した表現が，言葉どおりの浪費として受け取られることを警戒

し，すべてが無駄な消費であり軽蔑の意図を含むものではないと断っている文脈においてあらわれてくる。すなわち，日常生活における浪費という言葉は，「無駄遣いといわれているものについての軽蔑を意味するものであるということは，注意」に値するとし，「このような常識的な意味は，それ自身が製作本能の発露である」と指摘している(35)。ここからは，一般的にとりわけ製作本能に基づいた労働を展開する人にとっては，浪費が軽蔑の対象になり得ることが示唆されるが，続けてヴェブレンは，どのような消費が浪費に値し，そうではないお金の使い方は何をもって非浪費的と判断されるのか，そうしたことに注力することをけん制しながら，製作本能と浪費を次のように説明している(36)。

> その習慣や因習がつくり上げられてから，これらの品物がなくてはならぬものとなったということは，言葉の技術的な意味で，無駄なもの，もしくは無駄でないものとして，支出を分類することは，ほとんどなんらの関係がない。この点を決定しようとするばあいに，あらゆる支出をそれにかけてみなくてはならない試金石は，はたしてそれが人間生活全体を増進するのに直接に役立つかどうか――はたしてそれが非個人的に考えられた生活過程を促進するかどうか――，ということである。というのは，これこそが，製作本能の判定の基礎であり，そして，その本能こそが，経済的真理ないしは妥当性のあらゆる問題の最高裁判所であるからである。

すなわち，製作本能は人間生活に役立つことを目的として発揮されることが大切であった。ここでも確認できる重要なことは，人間において本来的に備わっている製作本能が，宇沢のいうように，人間や人間社会の再生産という人類種の保存を目的としたとすれば，なおさら閑暇であることをネガティブに評価するだけではなく，差別的な金銭的浪費を積極的に評価するものでもないのである。労働の社会的な意味，あるいは豊かさを高めるような使用価値を発揮する財やサービスを生み出すことが，製作本能としてはおのずから重視される労働対象になると言い換えることもできる(37)。

ただし，浪費は，製作本能が力を発揮した労働成果以外のものであると単純に割り切ることはできない。浪費は次のように論じられる(38)。

> 慣習的な支出は，それが立脚している慣習が，差別的な金銭的比較から発するものであるかぎり――それは，このような金銭的な名声，ないしは相対的な経済的成功の原理の背景がなくては，慣習的で拘束的なものとなることができなかったはずである，と考えられるかぎり――，浪費という部類のもとに分類されねばならない。

したがって，浪費について，「一定の消費の対象は，衒示的浪費の部類にいれられるためには，徹底的に無駄なものでなければならないという必要は，明らかにない」し，「ある品物は有用でもあり，また無駄でもあるかもしない」という解釈になるのである[39]。このように金銭的浪費の対象には，生活に十分ねざした有用物であると判断される財やサービスもあれば，そうではないものも含まれる。それは差別的な金銭的浪費が価値基準の最重要な要素だからであり，何が生活にねざした財やサービスであるかについても，時代がくだれば，この要素に照らして必要不可欠と判断されてしまうわけである――つまり，金銭的浪費という意味が認められれば消費の対象はなんでも良いのであるが，一方で，非常に高価なジャケットのポケットチーフがあったとして，それが金銭的浪費の対象として習慣化すれば生活にねざした必要不可欠な財となってしまうわけである――。

そうした意味でいえば，衒示的浪費と製作本能が衝突し，浪費であるか否かを判断することがあったとしても，差別的な金銭的浪費が定着してしまえば，あらゆる消費対象は必要不可欠と感得されてしまう。いくら人間が製作本能を発揮して技術的な合理性を追求したとしても，見栄を競う金銭的浪費という行為によって高価であるからこそ価値があると淘汰的に判断されてしまうわけである。

とはいえ，一方で，ヴェブレンは，浪費は無駄な性格をもっており，生活にねざした言わば限りなく素朴な使用価値を重視する消費行為にも目を配っていたと考えられる。すなわち，既述したように，生活様式が上昇して，ある見方からすれば浪費にみえる消費も，ある時から金銭的浪費あるいは衒示的消費という観点からして必要不可欠の行為として定着してしまうと，これらを引き下げることは精神的な苦痛が伴うと議論する過程で，次のことを指摘しているからである[40]。

> 現在の経済理論の言葉をもっていうならば，ひとびとはいかなる方向でもその金銭支出を縮小することをよろこばないけれども，かれらは他の方向よりもある方向に支出を縮小することをいっそういやがる。だから，慣習化した消費はすべて，しぶしぶと断念されるが，比較的にいって，ひじょうにしぶしぶと断念されるある種の方向の消費がある。消費者がもっとも頑強に固執する消費の項目や形態は，普通，生活必需品もしくは最低生活物資とよばれるものである。最低生活物資というのは，もちろん，種類や量がきちんときまって変わらない，厳格にきめられた財貨の一定量ではないが，しかし，当面の目的のためには，生活の維持のために必要な一定の，多少ともきちんときまった消費の総量をふくむものと考えてよいであろう。このような最低限は，多くのばあい，金銭支出がしだいに切りつめられるばあいに，いちばん最後に断念されるものと考えられよう。

当然のことかもしれないが，消費の対象には，人間あるいは人間社会の再生産が保証される財やサービスが含まれていなければ，人類が生き残ることはできない。こうした議論の可能性をヴェブレンも否定していないのである。使用価値としての財の意義を認めていると言い換えても良い。

以上のように，ヴェブレンは，製作本能について，社会的に有用な財やサービスを生み出す行為であると論じ，また人々は自分の労働がそのような意味をもつと考えたいのではないかということを示唆していた。しかし，労働の成果物である財やサービスが消費される過程に突入すると，金銭的な浪費という価値観に照らされて享受されるだけであり，客観的に観察される社会的有用性や労働過程で込められた製作者の意図など考慮されるわけではなかった。とはいえ，ヴェブレンも人類の生き残りのためには，使用価値として最低限の意味をもつ財やサービスの製造と消費を否定したわけではもちろんなかった。

また，これらの点を勘案して，筆者の後の議論に接続するためには，次の点について事前に注意を払っておきたい。すなわち，ヴェブレンが衒示的浪費と製作本能が衝突する可能性があることを認めたように，近代社会における衒示的浪費を掣肘する役割を，製作本能が抱いている可能性は含意として重視したいということである。

1-5. ボードリヤールの消費論への接続

以上のようなヴェブレンの議論は，一面で近代社会以降においても消費が伸びてゆく様を説明できる議論を構成しているようにみえる。繰り返しではあるが，まとめなおしておけば，二つの本能のような人間特性が重要な基礎となっており，第一に見栄を競う本能的な動機づけによって衒示的閑暇と衒示的浪費が行われ，階層間においてより上位の手段を目指すことが義務付けられてしまい，第二に，製作本能の開花によって衒示的閑暇の価値観がやや減退することによって，より衒示的消費が見栄を競う手段として有効性を増したというものである。ただし，製作本能は，単なる財やサービスの労働に終始し，衒示的消費の手段を提供するにとどまらず，社会的に有用な財やサービスを生み出す労働へと人々をかりたてる要素でもあることが論じられ，こうした意味では，衒示的消費を相対化する可能性も暗示されていた ── 筆者の過剰な解釈かもしれないが ──。

とはいえ，この議論の枠組みは，示唆してきたように重要な限界も抱えていた。すなわち，第一に，金銭的浪費という重要な概念設定は，見栄を競って他者とは差別的な結果を求めた行為を解き明かしたとはいえ，この見方の限界は消費対象が常に高価であり続ける必要がある点に求められる。正確には相対的に高価であり続けなければならない。もちろん，ヴェブレンも，衒示的暇閑という手段によって，高価な消費だけではなく何もしないという論理を用意していたが，既

に何度か指摘したように，近代に入ってからは金銭的な浪費が優位をみせていった。近代社会において見栄を競うための手段として重要性を増した金銭的浪費あるいは衒示的浪費は，まさに見栄を競うことを前提としているがゆえに，常に高価な財やサービスを対象とせざるを得なかったのである。この点で，現代社会の消費を解き明かす一つの限界を抱えていたと考えられる。

第二に，正確には限界というわけではないのであるが，浪費をめぐる議論において，衒示的浪費が，差別的な結果を生み出す目的で行われる限り，あらゆる消費行為は浪費と判断できるとはいえ(41)，製作本能を持ち出し社会的に有用な財やサービスを生み出す点にこの本能の意義を認めているようにもみえる点である。このことは，筆者にとって，これからの消費をめぐる議論の可能性や現在の社会問題を考えるうえで重要な示唆であると考えられる反面で（後述），消費の考察を深めるうえではある種の思考実験上の限界を伴っていた。生活必需品とでも呼べるような最低限の再生産を実現するための消費を議論の俎上にのせて，財の使用価値を含めていたためである。もちろん，このことはリアルな人間社会の捉え方であり，否定すべき論点ではまったくなく，後述のボードリヤールの方がやや空論的な様相を伴うものであるが，豊かな社会の消費のありようを捉えるときには，いったん棚上げにすることも重要な課題である。これらの点を踏まえて次にボードリヤールの議論を検討しておこう。

2. ボードリヤール『消費社会の神話と構造』における消費論の意義と限界

2-1. ボードリヤールのガルブレイス批判

ボードリヤールは，おそらく資本主義社会あるいは近代社会が一定の段階に達した時代における消費のあり方を念頭に議論を展開している。あとで詳しく論じるように，歴史的な分析方法を採用しているわけではないので，いつの時代のことであるかが明示されることはない。それでも西側諸国が経済成長を実現していた時代を反映した考察であることは，『消費社会の神話と構造』が 1970 年に出版され，今日の消費は次のような特徴をもつとして議論が展開されていることからうかがえる(42)。すなわち，ボードリヤールの議論は，冒頭で，1970 年当時の今日の消費について，われわれはモノの時代に生きているという説明から始まっていることを勘案すれば――ある程度豊かな社会ではいつでもそうであったかもしれないがという注釈を加えながらではあるものの――，基本的には当時における消費の特徴を論じながら消費社会の構造にせまっていると考えられる。同書の構想は，「第一部　モノの形式的儀礼」，「第二部　消費の理論」，「第三部　マス・メディア，セックス，余暇」，「結論　現代の疎外，または悪魔との契約の終わり」であるが，とりわけ第二部において消費構造の重要な論点が提示されている。

すなわち，ボードリヤールの消費構造論は，ガルブレイスの議論を批判的に乗り越えながら展

開される。ガルブレイスの『豊かな社会』における現代社会の消費にかかわる議論は次のとおりである[43]。所得の上昇と財やサービスの生産力の発展によって豊かさをまし，われわれは平等に近い経済的な条件を享受するようになり，経済学は貧困を対象としたものから豊かさを実現した時代状況に照らした分析方法を樹立する方向へと変化が求められている。消費に注目すれば，経済学の想定とは異なって限界効用が逓減することはなく，われわれは豊かさを享受したにもかかわらず財やサービスを追い求め続けている。それは，供給サイドなかんずく企業の手によって追加的に同一財や別の財を求めざるを得ないような仕組みが構築されたためである。すなわち，現代的な企業は，有り余っている生産力を手にしたおかげで，次第に生産物をいかに売りさばくのかという課題に直面し，消費者はこうした企業戦略に誘導されているというものであった。さらに，ボードリヤールの指摘によれば，こうした企業行動は「人為的アクセル」によって絶えず需要を昂進させるものであって，ガルブレイスをしてネガティヴに評価されるものになっているという[44]。

ボードリヤールは，これに対して，第一に，所得の上昇とある種の均一的な消費構造が何らかの平等性を生み出しているということと，第二に，人為的アクセルの対象者である消費者に欲求追求のストッパーとしての役割を期待することの二点に対して批判を投げかけている。

第一については，ガルブレイスも，もはや平等であるか不平等であるかという論点自体が豊かな社会においては重要性を失っていると指摘しながらも，相対的な貧困が消え去ることはないと指摘し，その要因を，現代社会の分配面における課題，言い換えるとある種の機能障害に求めているという[45]。いわば経済成長によって平等性を高めたと指摘しているわりには ── 平等が観察される指標は，おそらく所得や教育機会の平準化，階級構造の解消などと推測される ──，残された課題が多いことを認める論理構造になっているという。ボードリヤールにとっては，経済成長自体が不平等を生み出すことを前提にすべきことと，消費については平等化や画一化が実現されるものとしてではなくて別の観点で分析すること，これらの視点が大切であると批判を展開したのである。とりわけ後者の点は筆者の後の議論にとっても重要となるのであるが，そのまえにさしあたりボードリヤールの批判の趣旨を確認しておけば次のとおりである[46]。

> 楽観論者とともに「成長は豊かさを，それゆえ平等を生みだす」とはもういえないし，「成長は不平等をもたらす」という逆の極端な見解も採用できない。成長は平等なものか不平等なものかという誤った問題の設定を逆転して，成長自身が不平等の関数であるというべきなのだろう。「不平等な」社会秩序や特権階級を生みだす社会構造の自己維持の必要性が，戦略的要素として成長を生産・再生産するのである。別のいい方をすれば，技術的・経済的成長の内在的自律性は，社会構造によるこの規定性と比べれば，微弱で二次的なものにすぎな

い。

みられるように，経済成長によって不平等性が解消されたというより，不平等な状態を再生させるために経済成長が求められたのではないかと論じたわけであった。

続けて，たとえ経済成長によってある種の社会的な平等性が高まったとしても，それはよく観察すれば次のようにとらえられるし，ガルブレイス自身もそのような解釈を示しているという。すなわち，「ガルブレイスは経済的（したがって社会的）問題としての不平等の減少を喜んでいるが，それは，彼がいうには，不平等が消滅したからではなくて，富がかつてもっていた本質的利点（権力，享受，権威，尊敬）をもはやもたらさなくなったからであ」り，そのうえで，別の見方が必要として次のように指摘した(47)。

> 金持ちたちは控え目な消費を信条とするようになった。要するに，心ならずもガルブレイスは，平等が存在するのは（貧富がもはや問題でないのは），まさしく平等がもはや現実的重要性をもたなくなったからであることをよく示してくれている。平等はもう問題にならない。価値基準はもっと別のところにある。

経済成長やそれに伴う旺盛な消費を議論するためには，もはや社会的な平等性をものさしとしていては――この指標はボードリヤールにおいては必ずしも明示的ではないが，おそらく所得格差の解消あるいは社会的な豊かさを公平に享受する機会，教育機会の均等化などを指すのであろう――，関心としては不十分であり，後に議論する記号の消費という要素を考察する必要があると暗示しているわけである。

第二の点，すなわち，ガルブレイスが人為的アクセルの対象者である消費者に欲求追求のストッパーとしての役割を期待していることに対しては，次のように批判している(48)。

> つまりこの分析の観念論的な人間学的仮説が問題なのである。ガルブレイスにとって，個人のもろもろの欲求は安定化可能である。人間の本性には何かしら経済的原則のようなものが存在していて，「人為的アクセル」の作用がなかったら人間の目的や欲求および努力にさえ限界を設定するだろうというわけだ。要するにガルブレイスによれば，そこには最大限の満足ではなくて，個人の領域でのバランスのとれた「調和ある」満足をめざす傾向が存在することになり，この傾向は上述の過度に多様化した欲求の充足の悪循環に巻きこまれる代わりに，集団的欲求のこれまた調和のとれた社会的組織に組みこまれるだろうというのだが，こうした見解はまったく空想的である。

みられるように，個人の領域におけるバランスのとれた消費によって人為的アクセルにブレーキをかける役割を期待するガルブレイスに対して，「空想的」と断じているわけである。

2-2. 消費社会の構造における可能性

それではボードリヤールにとって消費はどのように紐解かれるのか。これについては，すでに広く知られていることかもしれないが，ごく簡潔にまとめてしまえば，われわれは差異化を求めるために記号の消費をしており，もっといえば，差異化のシステムに諸行為が服従させられている状態にあるというものであろう。こうした自身の考えについて，ボードリヤールは『消費社会の神話と構造』において断片的に様々な箇所で論じ続けている印象を抱く。いくつかの個所から確認しておこう。例えば，ガルブレイス批判を展開しながら論じられる「第二部　消費の理論」の「1　消費の社会的論理」における「差異化と成長社会」では次のように論じられる[49]。

> 欲求と豊かさの形而上学を超えて，消費の社会的論理についての真の分析をわれわれに指示する。この論理は，財とサーヴィスの使用価値の個人的取得の論理 —— 奇蹟への権利をもつ者と奇蹟から取り残された者とが存在する不平等な繁栄の論理 —— とはまったく別のものであり，欲求充足の論理でもない。それは社会的意味をもつものの生産および操作の論理である。

この指摘に続く次の論理展開が重要であろう。すべては記号あるいはコードとして存在するのである。

> しかしながら，社会の基本的過程である地位の上での差異化（誰もがこの差異によって社会に組みこまれている）には，生活的側面と構造的な側面とがある。前者は意識的で倫理的（生活程度や地位獲得競争や権威の尺度についてのモラル）であり，後者は無意識的で構造的である。それは個人を超えたところに解読の規則や意味上の制約が存在するといった，そのようなコード（言語の場合と同じだ）への絶えざる登録の過程である。消費者は自分で自由に望みかつ選んだつもりで他人とは異なる行動をするが，この行動が差異化の強制やある種のコードへの服従だとは思ってもいない。他人との違いを強調することは，同時に差異の全秩序を打ち立てることになるが，この秩序こそはそもそものはじめから社会全体のなせるわざであって，否応なく個人を超えてしまうのである。

われわれは，主体的に消費をしているようで，実際は，いつのまにか差異を確認し合っている

だけの状態に追い込まれているのである。さらに，引用にもあるように，こうした差異化の仕組みは，意識的に他者との違いをアピールするために行為を選択しているというだけではなく，言わば自己拘束的に知らず知らずの間に無意識的なものとして内面化してしまっているものでもある。別の個所からも確認しておけば，やや長文ではあるが，次のとおりであり，この点も後の議論において重要である(50)。

> けれども，こうした相対性の強制は，それに準拠してコードへの差異の書きこみが無限に続くというかぎりで決定的である。この強制だけが消費の基本的性格，つまり限度がないという性格を解明できる。この性格は欲求とその充足に関するいかなる理論によっても説明できない。というのは，充足は熱量やエネルギーとして，あるいは使用価値として計算すれば，たちまち飽和点に達してしまうにちがいないからだ。ところが，今われわれの目の前にあるのは明らかにその反対の現象―消費の加速度的増加，つまり巨大な生産力とそれ以上に狂乱的な消費力（両者の調和のとれた均衡という意味での豊かさは果てしなく後退してゆく）のあいだにさえも距離を増大させる需要の攻勢という現象である。この現象は，欲求の充足に関する個人的論理を根本的に放棄して差異化の社会的論理に決定的重要性を与えないかぎり，説明できるものではない。この差異化の論理と威信の単なる意識的規程とを区別しなければならない。なぜなら，これらの規定は依然として欲求の充足であり，プラスの差異の消費だが，差異表示記号のほうは，常にプラスであると同時にマイナスでもある。したがって，これらの記号は他の記号を限りなく指示し，消費者の欲求を決して満たすことがない。

コードの差異への無限の書き込みが強制されてしまっており，このことは，われわれが使用価値を満たしているという論理だけでは説明できない。旺盛な消費が持続的であることを実感しているわれわれにとってはなおさらそうであるはずだろう。そこで考えるべきことは，やはり記号の消費を繰り返すような差異化への服従のような事態の解明である。それは，規範的に肯定的な評価をくだせるような消費行為ばかりではなく，ときに言わば無駄といった否定的に判断されるような場合もあるという。そして厄介なことに，記号の消費によって，何らかの充足を実感し続けることは皆無であって，ある記号を得た瞬間にその記号はほかの記号を指示してしまい，ある意味では永遠に記号の消費を強制される事態へと陥ってしまったわけである(51)。

このようにして持続的な経済成長を実現し旺盛な消費が展開している時代状況を，ガルブレイスのように社会的な平等の進展と，生産活動がむしろ消費を必然化させている人為的アクセルなどと呼ばれる事態に対して消費者が欲求を充足させ倫理的に抵抗してあるいは使用価値の飽和状態を実感してブレーキをかけることとを否定し，ボードリヤールはむしろ記号の消費という仕組

みを解き明かすことを提唱したのであった。

この議論は，ガルブレイスの議論を乗り越える意図をもっていただけではなく，次の点でヴェブレンとも対比できる論理的な進展があったと考えられる。すなわち，ヴェブレンにおいては持続的な消費が，金銭的浪費あるいは衒示的浪費などと表現され，常に高価であることが重要な価値基準であった。これに対して，ボードリヤールの記号の消費論あるいは差異化を求め続ける消費論は，浪費や高価であることに必ずしも意味はない。そのうえヴェブレンがややこだわったように，なおかつガルブレイスも放棄し得なかったように財やサービスを消費する際の言わば使用価値とでも呼べる行為の意味に対して，ボードリヤールの議論においてはすべてが差異化を目的としているので，必ずしも使用価値として意味があることは重視されない。もっと言えば，使用価値に意味はない。単なる記号の消費であり，それは永続的な差異化を義務付けられた抽象的な人間像のなせる業であるためであった。そのため，ヴェブレンと異なって，旺盛な消費の実態は，必ずしも高価である必要はなく差異化が重要であれば，清貧とでも呼べるような消費行為が意味をもつことは充分にあり得る。次のとおりである(52)。

> 個性化と呼ばれる地位と生活程度の追求が記号の上に成り立っていること，モノや財それ自体ではなくて差異の上に成り立っていることを理解するのは非常に重要だ。この事実だけが「過少消費」や「目立たない消費」の逆説，つまり威信の超差異化という逆説を説明してくれる。それはもはや（ヴェブレンによれば「よく目立つ」）見せびらかしによってではなく，控え目な態度や飾りのなさによって示される行動，反対物に変貌する過剰な見せびらかしであり，より巧妙な差異でもある。差異化は，この場合にはモノの拒否，「消費」の拒否のかたちをとることができるが，それはまた極上の消費なのである。

ボードリヤール自身もやや批判的に紹介しているように，ヴェブレンが見せびらかしや高価であることにこだわったことに対して，差異化を求める記号の消費ととらえたことによって，言わば消費に対する金銭面や具体的な効用といった価値尺度を放棄したのであった(53)。

以上，こうしたボードリヤールの議論は，一見，財やサービスにみたされ人間や人類の再生産が大きな課題とはみなされなくなった豊かな社会において，なぜ人びとは高低様々な価格が設定される対象を消費し続けるのかという問いに対して，一定の説明仮説を与え，消費をめぐる議論としても前進を見せたのではないかと考えられる。

2-3. 消費社会論における若干の限界

しかし，ボードリヤールの議論もいくつかの限界を抱えていた。ここでは，ガルブレイス批判

にみられる若干の論理展開の矛盾を指摘することによって，人間が永続的に差異化を求めることを動機づけられて，何らかのシステムに従属し，こうした構造から抜け出ることはできないと，一見，描かれているかのように読めるとはいえ，実はボードリヤールもこうした仕組みからの離脱の契機を期待していたことは否定できないのではないかということを示しておきたい。さきほどの表現を利用すれば，人為的アクセルにブレーキをかけて生産サイドからの継続的な消費喚起を萎縮させることはできるだろうし，差異化の動機づけに疑問を抱く余地もボードリヤール自身の言葉のうちにあるということになる。

例えば，ボードリヤールは，「3　豊かな社会のアノミー」において暴力について論じている。消費社会は同時に抑圧や暴力を伴うとし，暴力が発露されるのは，消費社会が豊かさや幸福を保証するものでは必ずしもなく，繰り返しではあるが，差異化を求める社会への参加を強制するにすぎないからであるとした。すなわち，「豊かさとは常に幸福の神話（心理的葛藤から生じる緊張の解消と，歴史や道徳を超越した幸福の神話）として体験されると同時に，新しい型の行動，集団的強制，規範への多かれ少なかれ無理強いされた適応の過程として耐え忍ばれるという曖昧な性格をもっている。「豊かさの革命」は理想社会の出発点とはならずに，別の型の社会をもたらすにすぎない」というわけであり，暴力は別の型の社会に参加することを拒否する行為と位置付けられている[54]。もう少し具体的には次のとおりである。

> 豊かさそのもの（豊さそのものさえも，というべきだ）が新しい型の強制のシステムにすぎないという仮説を少しでも認めるなら，この新しい社会的強制（多かれ少なかれ無意識的な強制）には新しい型の解放の要求しか対応できないことがすぐにわかるはずである。今のところ，この要求は，無差別的暴力の形態（物質的・文化的財の「盲目的」破壊），または非暴力的で逃避的な形態（生産や消費への投資の拒否）をとった消費社会に対する拒否となっている。もし豊かさが自由を意味するなら，こうした暴力の発生はとうてい考えられないが，豊かさ（経済成長）が強制とすれば，この暴力もおのずと理解できるし，豊かさの論理的帰結とみなすこともできる。暴力が野蛮で無対象で非公式なものであるならば，それによって否認される強制自体がやはり不明確で，無意識的で，漠然としているからである。

もちろん，こうした暴力は，貧困を理由としたものではなく，差異化を動機づけとする半永久的な記号の消費というシステム社会に参加することへの抵抗である。そのうえ，ボードリヤールは，抵抗の果てには「疲労」という社会現象を生んでしまうと指摘した[55]。そうだとすれば，やはりボードリヤールもこうした経路を介して，差異化を求めるだけの消費行為によって構築される人間社会からの脱出口を，なんらかの人間的な営みのうちに見出すことができる可能性を示

唆しているのではないだろうか。敷衍すれば，累積的な知識の基盤，継続的な学習，経験的な感性などに基づいた何らかの制度的な発展あるいは生活基盤の展開が，こうしたシステムを相対化する経路へと議論を拡張することもあながち塞がれているわけではないことになる。もちろん，ボードリヤールは，この書物でそこまで議論しているわけではないが，本書の締めくくりも陰鬱な見通しで終わっているわけでは必ずしもない。最後のほんの少しではあるが，「われわれはモノ（OBJET）が無であることを知っている。モノの背後には，虚ろな人間関係があり，膨大な規模で動員された生産力と社会的力が物象化されて浮きぼりにされる。ある日突然氾濫と解体の過程が始まり，一九六八年五月と同じように予測はできないが確実なやり方で，黒ミサならぬこの白いミサをぶち壊すのを待つことにしよう」というのであった(56)。

どのような意味でシステムにとらわれない人間行為を措定しようとしているのか，暴力と疲労以外に明瞭ではないのであるが，批判の対象となったガルブレイスにおける消費者のブレーキの役割と類似したような，ある種のシステム破壊の可能性をボードリヤールも期待していなかったわけではなかっただろう(57)。

2-4. 消費社会論の限界

また，ボードリヤールの消費社会論は，一見，現代社会の消費の重要な点を指摘しているのであるが，分析手法としては次のような難点を残したのではないかと考えられる。すなわち，ますます使用価値を問わない財の分析になりやすいうえに――この点はヴェブレンにおいても一面ではそうであったが――(58)，高いか安いかという貨幣を媒介とした価格情報を言わば否定したことであった。前者の視点でいえば，新しい財が登場することが，社会的にどのような意味を持つのかを議論する枠組みが溶解してしまっており，言い換えると，財の視点から生産力の水準を推し量ることを難しくした。後者の点は，ヴェブレンの高価であることという論点を相対化した点で重要だったと考えられるのであるが，価格あるいは貨幣というものさしを消費分析から後景に退けたために，所得水準に裏打ちされた消費の推移を議論することを困難にしてしまったと思われる。所得が上昇すれば多くの財やサービスを享受できる，あるいは所得が一定であっても供給サイドの生産性上昇が価格の引き下げを伴い実質的な消費が増加するといった議論の余地は狭まったのであった。そのうえ，前者の使用価値という視点を組み合わせて生活を豊かにするような財の需要が可能になった，あるいはまだある点では不十分であったなどという考察の可能性をも狭めた。これは，繰り返しだが，一面で新しさを持ったと同時に，他面で経済史分析への応用を非常に困難にする議論でもあったと考えられる。

もう少し議論しておけば，次のようなことである。ボードリヤールは，おそらく，商品によって結び付く近代人の言わばモノ的な関係性の構築を描いたマルクスの議論をベースとしながら，

コードの消費というシステムにからめとられる近代人の疎外された姿を描きだそうとしたのだと考えられる。ただし，マルクスの商品は，商品化の歴史として，需要構造と供給構造の両面をにらみながら，とりわけ後者の生産力の向上を軸として，人間社会の発展なり衰退を描くことに応用しやすい論理を内包していた(59)。

しかし，消費に限りなく注目し，そのうえ使用価値や価格というものさしを放棄したボードリヤールの議論は応用が非常に難しい性格をもった。つまり，消費という人間行為が，差異化を求めるだけの動機に基づいていたとしたら，こうした事態の分析方法は，常に差異化の発見となってしまいかねないのではないだろうか。言い換えると，差異化は，一見，近代社会，もう少し具体的に言えば，資本主義社会の特徴の一端を表しているかのように見えるものの，資本主義社会の変質を議論しようとしたときに大きな弱点を抱えており，消費行為が記号的な差異化に基づくとすれば，その発展なり衰退なりはどのようなものさしで判断したらよいのであろうかという課題を抱えている。すべてが差異化であれば，A 財と B 財の差が有効な意味をもった時代から，A 財と C 財の差異化が求められる時期に移ろうことがあったとして，これは B 財から C 財への発展ととらえて良いのであろうか。おそらく違うであろう。さらに，B 財は人々から忘れ去られたころに再び差異化の重要な対象として消費を伸ばしたとすると，これは衰退なのか発展なのか，判断することは容易ではないだろう。すなわち，差異化を求めるだけの記号の消費という，言わばシステムのようなものの誕生は，その内的な様相を時代と共に描くことを非常に難しくするのである。このことは，歴史的な関心が乏しいと言い換えることもできる。次節でもう少し論じておこう。

3. 消費分析における歴史的関心の乏しさ

3-1. みせびらかしと差異化の同時的展開

消費社会論が，記号の消費という事態の段階的な推移を論じることを非常に難しくする枠組みであることを，既存の研究に依拠しながら若干，提示しておこう。川北稔の研究によれば，記号を消費する仕組みの萌芽は，産業革命の時代に突入したイギリスに先駆的な姿として登場していたのではないかという仮説を導き出すことができる。川北は，身分秩序によって消費生活を定めた規制がはずされていった過程と，これに重なりながら「ほんらいの身分や地位より「ちょっと上流」を気取って上の階層の生活様式をまねる「贅沢」」を多くの人々が実践しはじめた過程が，「マイ・フェア・レディ」型社会への道，すなわち生活様式がステイタスによって決められていた時代から反対に生活様式がその人のステイタスを表すものへという時代的な変化を読み解くうえで，重要な対象であると論じた(60)。これによれば，16，17 世紀に消費生活に対する身分的な

制約は後景に退き，18 世紀には上流気取りの消費が行なわれるようになった。衣服の規制を主とし，なおかつ階層間格差を固定させることを目的とした「贅沢禁止法」の最盛期は，1463 年法から 1554 年法のおよそ一世紀であって[61]，16 世紀中ごろから庶民院を主に構成したジェントリ層の支持を得られなくなり，これらの諸法は廃止に向かった[62]。その理由は，新しい事業を起こし住民に生活の糧を与える役割を自覚したジェントリ層が，需要の拡大に基づいた国内産業の保護を求めたからであった[63]。

そして川北は消費社会の萌芽を見ながら市場の拡大が産業発展を促すという価値観を育んだことを指摘する。すなわち，1691 年に著されたジョン・ロックの『利子論』から，「国民の贅沢な流行を生み出すのは，〔その商品の〕効用ではなくて虚栄心なので，競争は，だれがもっとも便利な，あるいは有用なものを手に入れるかという点でおこなわれるのではなく，誰が…もっとも高価なものを手に入れるかという点でおこなわれる」という議論を引用し，ロックは人々が贅沢な流行を追う理由を，それを追わなければ恥ずかしいからであると論じたことを紹介している[64]。そのうえで，「流行を追って贅沢をする者，そうする経済的能力のある者こそが尊敬されるべきジェントルマンたりうる，とすれば，人びとがこぞって流行を追い，「贅沢」に走るのは当然のことだった」とし，こうした恥ずかしいという理由で流行品を追う姿は中・下層民にも拡大し[65]，18 世紀には贅沢は敵ではなく需要を生み出し国内産業を育むものとして肯定的に論じられていったという[66]。

ロックが論じたような流行を追う人々の姿は，ヴェブレンの見せびらかし消費という事態と非常に整合的な指摘であった。ここではボードリヤールの指摘するような差異化を求めるだけの記号の消費という社会とはまた異質である高価なものを無条件で評価する消費行為が観察された。

ただし，高価なものをみせびらかす消費行為が広く行き渡る時代とほぼ時を同じくして，次のような事態も観察されはじめたという。すなわち，高価な財を対象とする消費行為の浸透は，16 世紀後半には服装から階層の違いを見分けることを難しくするほどに進展し，流行も短縮しながら 1770 年には『レディース・マガジン』という服飾雑誌の発刊をみるに至った。多くのものが富める者の服装を着用したため，むしろ富者たちは労働者のスタイルを真似し始め，ついにはジェントルマンの服装は目立たない素材で形だけで優雅さを表現するものへと転換し，「ファッションをめぐる社会的・階層的競争に疲れた上流階級は，地味であまり変化しない服装こそが上品だと主張することで居直」ってしまったという[67]。そして川北は衣服に関する大衆市場の成立が産業革命の発展をけん引した一つの要素になったと展望した[68]。高価なものがよいのではなく，労働者スタイルもときには重宝されたうえに地味で変化に乏しい服装を富者は求めたのであった――いちおう上品であるという高価に近い価値を与えられているが――。差異化を求める記号の消費にすぎない事態が，16 世紀後半に登場していた可能性が考慮できるわけである。こ

うした事態は，ボードリヤールの指摘した消費社会と大差ないようにみえる。

また，イギリスらしいファッションの成り立ちを19世紀から1920年頃にもとめ，このことを，とりわけ女性の衣料品のあり方から解き明かした坂井妙子の研究によれば，興味深いことが読み取れる[69]。19世紀はじめまでにプリント・コットンは，生地，色，デザインともに発達し大量に安く生産されるようになり，丈夫なこともあってワーキングクラスの女性もファッショナブルなスタイルを真似することができるようになり1830年代には大いに流行した。ところが，安価かつ丈夫なうえ，洗濯が容易であることから衛生さを兼ね備えたがゆえに，家事使用人の労働着としても重宝され，プリント・コットンは次第に二流の素材に成り下がってしまった。

坂井によれば，ビーチやレジャーが興隆した1920年代以降，プリント・コットンは再び日の目をみると解釈されてきたが，実は，1870年代にリバイバルヒットしたことがあったという。それは次のような経緯であった。すなわち，チャールズ・ディケンズの小説『バーナビー・ラッジ』（1841年）に登場する女性，ドリー・ヴァーデンをある画家が作品に描きこれをディケンスが所有するに至ったが，1870年の作家の死亡と共に競売にかけられ公表されるに及んで，メディアによって「イギリス乙女の典型」と絵画は評価された。これがきっかけとなり「ドリー・ヴァーデン・コスチューム」が流行となって，当時の雑誌にスタイルが掲載され，「時代遅れの花柄チンツの複製品で作った安価なドレスが『ファッショナブル』とみなされた」という[70]。坂井はそのうえで次のように指摘している。すなわち，「これは二重に前代未聞のことだった。本来，ファッションとは『最新』でなければならず，『裕福な』顧客のために作られた『高級な』服装を意味した」が，この流行は「プリント・コットンの伝統を独自に解釈することで，古風で安価なドレスをファッショナブルなアイテムとして」，「若く，裕福とは言えない下層ミドルクラスの女性」を対象にしたという。最新でなかったばかりか，対象も裕福な階層ではなかった点で二重に新しいというのである。

この事例から読み取れることは次のことである。すなわち，第一に，時代遅れであることが新しい記号として登録され流行したことと，所得の多寡が問題ではなかったことから，ボードリヤールの消費社会あるいはシステムに近い様相を読み取ることができるだろう。第二に，そのうえで，なぜプリント・コットンはリバイバルしたのか，それ以外の財は，なぜ沈滞し記号として登録されなかったのか，さらにいえばプリント・コットンがリバイバルしたことは時間軸に照らしたときどのような時期区分の視野を広げてくれるのであろうか，非常に評価が難しくなると感じられることである[71]。

3-2. 歴史分析の難しさ

以上の事例が，ボードリヤールの指摘した消費社会と大差ないとすれば，こうした消費社会の特徴は，所得の上昇が一定の階層に及ぶことによってあるとき誕生し，記号の対象を増やすことによって量的な拡大をみせ，そのシステム内部の質が時代と共にかわることはないように考えられる。人間はいわば非歴史的な行為として消費による他者との差別化を本来的に備えており，消費社会の展開は，一部の富を集中した支配階級に閉じられていたものから，所得の上昇とともに拡大するものであって，時代を画するとすれば，川北の例にみられたように，ジェントリ層の経済力の上昇，これに続いた労働者階級の所得上昇などに基づくという理解しか及ばないのではないだろうか。記号の消費というシステム自体の発生，制度化，終焉といった歴史的な推移をうかがいしる方法を発見することは難しいということである。

経済史的な関心から検討すると，ボードリヤールの消費社会論が，一見，現代社会の消費の重要な点を指摘しているとはいえ，分析手法としては以上のような難点を残したのではないかと考えられる。もちろん，市場の発見が価格分析という方法を生み出し(72)，商品化の歴史が価格分析の応用を介して歴史的な視点の導入にも貢献した可能性が考慮できるからといって，このようなツールとしてのものさしがなければ経済史分析ができないというわけではまったくない。同様に，歴史学の分野においては，言わば分析視覚自体の創造とともに時代像をとらえることは，重要な方法として知的営みによって育まれてきたと考えられる(73)。とはいえ，言いたいことは，次のような論点である。

すなわち，ボードリヤールのような消費の議論を遠方に学びながら経済史研究において分析を深めようとするとき，所得の上昇と，生産力の発展に基づいてどのような財の生産が可能になっているのかという論理が重要な指標になると思われるし，実際そのような方法がとられてきた(74)。とはいえ，こうした分析が消費のありようをリアルに説明しきっているとはにわかには判断しがたく，繰り返しであるが，なぜ A 財は売り上げを伸ばし，なぜ B 財はそうではないのかという問題提起に十分応じられるものではなかった。一定の客観的な条件を提示することにとどめ，選択的な消費の対象については人間が決めることであって科学的な分析の俎上にのらないという割り切り方も重要ではあるが(75)，高度成長期を経たのちの 1970 年代から現在の日本経済の立ち位置を考察する視点からすれば，やはり消費の分析を所得上昇とそうした条件に基づいた市場拡大，それに応じる供給条件あるいはそもそも市場拡大を促す生産力の発展という視点のみで満足するわけにはいかないだろう。言わば，なぜ人々はある年には赤い衣服を購入し，別の年には緑を選択するのか，さらにはある人は野球観戦か外食をするかで迷い，別の人は野球観戦か

コンサートで迷うといった事態に対して，所得の上昇や選択的な消費の可能性が増したという客観的な条件に迫るこれまでの方法では，肉薄した説明を行うことは難しいのではないかということである。この点で，高価であることだけではなく，差異化を動機とする記号の消費論は，有効な方法を提示したのであったが，みてきたように財やサービスの変遷から歴史的な考察を豊かにする可能性を開く方法では必ずしもなかったのである(76)。それでは，われわれはどのようにして個性的な消費が展開される時代の全体像をとらえていったらよいのであろうか。次節以降で考えていこう。

4. 経済史における消費分析の難しさ

4-1. 日本経済史における消費をめぐる研究の意義と限界

日本経済史の分野では，近年，消費に関する研究が行われ，実証の深化のみならず，様々な方法上の工夫が進展している。これらの点については，すでに若干の検討を行ったが(77)，改めて論点を整理しながら課題を展望したい。すなわち，消費を対象とする時期に関する課題と，経済史としての消費分析における一定の難しさを指摘しておきたい。

近年，消費に関する歴史分析を進めた満薗は，戦間期を対象として，所得上昇が伴わなくとも消費に対する意識レベルの変化が生まれ始め高度成長期の大衆消費社会を準備したことを指摘している(78)。四つの視点から考察が進められ，それらは①モダニティという消費のパラダイムに注目すること，②その際，抽象的欲望と具体的欲望とを峻別する理解が重要であること，③消費のあり方と日本型流通の構造的特徴との相互関係を視野に入れること，④小売商の市場像なる視点を導入し品揃え物の動態を把握することであった(79)。両大戦間期は，通信販売，月賦販売が普及し始め大衆市場が対象として浮上し，そこではモダニティパラダイムに沿った品揃え物が構成された。教育・運動・メディアを介して，衛生・栄養・健康・科学といった合理的な生活像と，美容・流行・娯楽といった「享楽的」な大衆文化とが併存し，これらに応じた品揃え物が登場した。具体的な財やサービスに直結しなくとも，衛生的，快適で機能的，流行といった欲求を満たそうとする抽象的な欲望が浮上し，これらは生物学的条件にねざした内生的欲望とは区別され，ある種の人為的な操作で誕生したものであった。モダニティと称される新しい抽象的な欲望にねざした具体的な財やサービスの消費は，小売商の品揃えによって実現した。ただし，具体的な消費の対象は，規格化され全国市場に画一的に進んだわけではなく，地域差を残したことによって日本的とでも呼べる流通構造を残存させたのであった(80)。

また，近年，中西聡・二谷智子は，生活水準や所得の状態などを史的に分析するような消費市場論的視覚と，ヴェブレンの見せびらかし消費のみならず，贈答文化といった視点から育まれる

消費文化論的視覚とがあまりかみ合わずに議論が進められてきたとし，これらの接合を試みながら近代から戦間期を対象に研究を進めた[81]。膨大な一次資料からどのような財やサービスがいつ頃から需要されたのかといった消費動向を解き明かしており，それは，地域差のみならず，消費主体が地盤を築いた本業の違いなどから，消費の共通性や相違性に結びついているという関心から検討された。とはいえ，財やサービスごとの消費状況にやや偏重した議論となっており，地産地消や寄付行為などの何らかの社会的な意義を見出すことができる可能性が示唆されているものの，それ以上の積極的な方向性は見出しがたい。

ほかにも消費をめぐる議論は最近さかんに進められているが[82]，以下では，やや満薗の議論に立ち入りながら，課題を考えておきたい。すなわち，満薗の議論は，所得上昇によって消費のあり方を議論する方法よりも，具体的な財やサービスから消費の実態とでも呼べる事態により迫ろうとした点に重要な新しさがあったと考えられる[83]。とはいえ，第一に，やや欠如論的な批判であるが，やはり継続的な所得の上昇を実現しながら選択的な消費が多数の人にとって可能となり，それらに応じ得る生産力の持続的な発展が生まれる条件が，大衆消費社会の形成と言われ始める高度成長期以降であることを考慮すると ── もっとも 1990 年代以降の成長率が伸び悩んだ時代については新たな枠組みで時代の変質を議論する必要は残されているのではあるが ──，高度成長期，とりわけ安定成長期の分析においてこそ消費を対象としてとりあげ，資本主義のあり方を議論する必要があると考えられる難点である。そして，やや筆者の関心に照らして課題を提示しておけば，横並びの画一的な消費から個性的なそれが生まれ始め成長率を鈍化させ高成長経済の時代 ── 高度成長期 ── が終焉に向かったとすれば[84]，個性的な消費が開花する安定成長期以降の分析においてより消費を考察する意義が高いと考えられることが重要である。

第二に，抽象的な欲望がどのようなキーワードや価値観を反映して内実を変化させたのかという関心は，ボードリヤールの消費社会論がシステムのあり方のみを議論した方法だったのに対して歴史学としての分析手法を切り開いた重要な道を開拓したとはいえ，経済史の関心に立脚すると，資本主義の変質としてこれをどのように位置づけたらよいのかという難点が残る。抽象的な欲望の内実が，経済の仕組みのあり方を議論できるのかどうかと言い換えても良い。ボードリヤールの差異化を動機とした記号の消費という議論に対して，抽象的欲望の具体的なありようを歴史分析として考察した貢献は大きいのであるが[85]，このことが日本の資本主義における何らかの変化を示すとすれば，どのように議論を進めたらよいのかという課題と言い換えることもできる。

関連して，満薗の議論が，やや言説分析に立脚した論理展開であることが理解を難しくしているのではないかと考えられる。すなわち，教育・運動・メディアを介したモダニティパラダイムの形成において，主語がはっきりしない点が，システムの誕生と終焉を歴史的に描く際の難しさ

を示している[86]。システム論の限界は主語がないことのように思われ，気づいたらシステムが生まれ，皆がそれに参加せざるを得ないという論法が採用されやすい。そのためもあって，システムがいつ生まれ，どのように修正を被っているのか理解しにくい。永続的な印象も与えるし，非歴史的に人類の誕生とともに生まれたとも想定できるが，そうであれば，なおさら時代と共に変化するものさしを導入すべきであろう。筆者の勘違いを含むのかもしれないが，当時の読者や消費者が主体的に選びながらも，そうした刺激を与えるのは出版社や企業でもあって，とはいえ彼ら自身も自らが創出しているという意識を抱いているのかどうかわかりにくいうえに，観察者の目線でもっても何がけん引しているのかという課題を設定することが容易ではないように考えられる[87]。

第三に，だとすれば，消費のあり方と産業構成の変化との両面を見据えながら時代の全体像を把握することがやはり大切であるということになるだろう。そして，高度成長期，とりわけ安定成長期以降の国内需要が個人や家計によっても支えられ，そうした市場を相手とした産業が経済成長や日本社会のあり方に影響を及ぼしていることを念頭におけば，繰り返しになるが，より新しい時代，すなわち高度成長期や安定成長期を対象とした分析においてこそ消費が重要な対象となるだろう[88]。

4-2. 課題の展望

これらを踏まえると，満薗の方法論と，中西の消費市場論的視覚と消費文化論的視覚を複合した方法論とを生かしながら，所得の上昇だけで説明しきれない消費のあり方を具体的な産業史レベルで実証的に積み重ねることが大切であろう。そうした課題を見据えると，情報通信産業，サービス産業，サービス産業の充実を限りなく伴う製造業の発展をとらえながら，消費のあり方と組み合わせて議論することがカギとなってくるだろう[89]。以下，安定成長期以降の経済構造をどのような視点でとらえるのかについて，これまでの消費をめぐる論点を継承しながら，これからの議論における方向性の見通しを，かなり大雑把なものとなってしまうが，提示することとしたい。

1970 年代から 1985 年のプラザ合意あたりまでの安定成長期は，生産性上昇の伸び悩みに直面しつつも雇用と日本社会の再生産を支える製造業が持続的な発展をみた一方で，情報通信産業やサービス産業が発展し始めた時期と考えられる[90]。これらの考察にあたって，次の三点を軸として課題にせまることが大切だろう。第一に，ガルブレイスが指摘したように，製造業が抱えた生産力のはけ口を恒常的に保つ必要から，需要が創出されざるを得ず，それは所得上昇のみならず消費規範あるいは生活規範の提示でもあっただろう —— この点はボードリヤールが指摘したように，差異化を求める動機づけに沿うように新たな商品の記号への登録を絶えず行うことになる

のかもしれない――。こうした製造業の消費者に対する刺激は，直接人に労働力を提供するようなケースを含むサービス産業の充実を伴ったと想定される。

第二に，このような製造業から求められる市場創出の機会からも生み出された，情報通信産業やサービス産業の発展は[91]，生産者と消費者との接合をより簡易化し始め，抽象的欲望を具体化する品揃えはより豊富化，迅速化なおかつ丁寧な方向にむかったのではないかと考えられる。

第三に，個性的な市場の形成，あるいはボードリヤールの指摘したような差異化を求める記号の消費といった事態が生まれたことは，生産サイドにとってもより選択肢の広いものを提供せざるを得ない課題をつきつけたことを意味した。すでに指摘したことではあるが，これは多品種少量生産に強みをもった日本の企業にとっても生産性鈍化の要因にならざるを得なかったが，他方で柔軟に対応する方法も開拓された。この点は，自動車産業における考察が豊富だが，アパレル産業などを事例とした中小企業の対応力，同業者組織，地域政策などの観点からも読み解かれる必要があるだろう[92]。製造業であっても限りなくサービス産業に近い特徴をもつことを考慮した分析方法が重要になると言い換えることもできる。さらには直接人に働きかけるような旅行産業，芸能産業などのサービス産業における労働過程と市場の形成を資本主義の変質を意識しながら解き明かすことが求められる[93]。

このように個性的な消費が展開される時代においては，サービス化を伴うような産業構成の変化の方向性と，抽象的な欲望のあり方から求められる品揃えの展開がどのような具体的な消費のあり方に結実するのかとの，双方向を視野におさめながら考察する必要があるだろう。アパレル産業，芸能産業，スポーツ産業，旅行産業がどのような労働過程を展開しながら消費メニューを提供し需要されているのか，さらには自動車や家電産業がいかに柔軟な製造方法を生み出しいかなる欲望の刺激によって買い替えや新規需要を開拓しているのか，こうした方法で産業史分析を進め時代の全体像をとらえることが大切になる。

さらに，安定成長期以降の長期不況期とも呼ばれる現在的な時代の課題を読み解くうえでも，消費のあり方と産業構成の変化に注目することは重要であり，その場合，とりわけ産業構成のサービス化を解き明かすことが大切であると考えられる[94]。現在的な経済構造の把握とサービス産業の史的分析について，とりくむべき課題は多様であるが，ひとつ考えられる重要な方向性を指摘しておくと次のとおりである。すなわち，資本主義社会の誕生とともに，労働力が商品と化したことと，自身の労働成果がいかに反映されているのか見えにくい迂回的な事態の登場とが労働疎外を生んでしまったものの，サービス産業が直接人に働きかける労働力の提供であるという特徴ももっていることを考慮するとき，この産業がこれらの課題を少しずつ克服する機会を提供するものとして位置づけられるのではないかということである。この点で，ヴェブレンが製作本能は社会的に有用な財やサービスに結実する労働であると考えたことは重要な示唆を与えるで

あろう。すなわち，他者に直接働きかける労働過程に従事することによって，自身の提供するサービスの使用価値あるいは有用性を理解し，本能として労働に従事するということだけではなく，もちろんお金のためだけでもなく，労働を通じた生きる実感を得る機会を増すことができるのではないかということである。もちろん，ボードリヤールが指摘するように，心づけや気遣いさえも継続的に記号を生み出すためのシステムに過ぎないのかもしれないが[95]，労働を介した人生の実現という人間的な営みの可能性を探ることも許されるのではないだろうか[96]。

お わ り に

以上，ヴェブレンが指摘したように，生産労働を免除された所得水準の高位な階層は，衒示的閑暇や衒示的浪費を，見栄を競うという本能に近い動機づけに基づいて実行していった。ただし，製作本能が衒示的暇閑の価値観を相対化したことによって，近代社会以降は金銭的浪費（衒示的浪費）が見栄を満たすうえで重要な手段として浮上した。こうした見方は卓見であったとはいえ，ここで描かれたことは，高価であることが財やサービスを意味づける行為であって，高価であることをものさしとしたがゆえに，さしあたり近代社会における消費のあり方の全容を説明するうえで難点を残した。

この点においてボードリヤールが差異化という動機づけに基づいた記号の消費という論理を導き出したことは重要であり，端的には高価なものではなくとも貧しさを伴う消費が有意義であることを議論の俎上にのせることとなった。しかし，記号の消費という論理は，たえざる差異化を発生させるものであって，消費の内容から史的因果関係を論じるあるいは経済史の関心から時期区分を行うことを難しくさせるものでもあった。

これに対し，満薗の方法は，抽象的な欲望を具体化する際の品揃えを提示しながら特定の時代における消費のあり方を解き明かそうとした点で重要であった。とはいえ，満薗の意図とはやや異なるかもしれないが，次の諸点が課題として残されたのではないかと考えられる。すなわち，消費のメニューを作り出す担い手が明瞭ではないこと，やはり消費だけでは時代の全体像が解き明かせないこと，さらにはより新しい時代においてこそ消費と生産のあり方を課題とする必要がありそうなことなどに難点を残した。

もちろん，これまでの日本経済史研究が消費の分析と産業構成の変化を接合した有力な見解を提示してきたわけではおそらくないから[97]，満薗の議論は重要であった。しかしながら，指摘したように，消費に注目するだけで時代の全体像に肉薄できるものでもない。そこで，最後に，やや乱雑に整理したように，高度成長期から安定成長期をみすえて，さらにはバブル経済崩壊後の長期不況期までを展望しながら，製造業の需要創出，とりわけ企業が主体となって製造方法の

みならず販売方法などの点においてどのような対応を進めたのか，情報通信産業とサービス産業の発展とがいかなる消費メニューを提供するものであったのか，こうした事態を，個別産業の研究から解き明かす重要性を述べた。繰り返しとなるが，自動車産業や家電産業の製造方法と需要創出方法，アパレル産業，芸能産業，スポーツ産業などの産業史的な分析が課題となるであろう。

そのうえで，現在的な課題を視野におさめた考察も重要になる。すなわち，産業構成のサービス化を，この産業の特徴に即して客観的に考察する方法を編み出すことが大切であり，これらに歴史的な意義を与えていく指標として生産性や経済成長という概念設定を相対化し[98]，さしあたり次のような地平を意識した考察を進めることが肝要となるだろう。それは，直接他者に働きかける労働過程のウェイトが増すサービス産業が主流となることによって，ヴェブレンがとりあげた製作本能という論理が，われわれの労働をより生きる意味を実現するものへとアップデートしてくれる基礎を与えてくれるかもしれないという可能性を抱きながら，上記に列挙したような産業の分析を進め ── すなわち，自動車産業・家電産業，アパレル産業，芸能産業，スポーツ産業などのことである ──，時代の全体像を考察することである。これらの実証的な研究は今後に委ねたい[99]。

《注》

（1） 以下の点については，少し検討したことがある。河村徳士「消費をめぐる議論の意義と音楽産業分析の可能性」『城西大学経済経営紀要』第 37 巻（通巻第 42 巻），2019 年。

（2） こうした時期区分について，経済史の分野においてはまだ検証の余地が大きいと思われる。とりわけバブル経済の時期を，安定成長期の構造に根差した事態ととらえるか，長期不況の時代の幕開けとして位置づけるのかによって時期区分は変わり得るだろう。さしあたり，ここでは『講座・日本経営史』1-6 巻，ミネルヴァ書房，2010 年～2011 年の方法を参考にしている。

（3） なぜ，ヴェブレンとボードリヤールを参照軸とするのかについては，さしあたり消費に関する考察を進めた重要な研究者とみられるからという以外に熟考した理由は乏しい。何らかの学説史上の意義を踏まえた取り上げ方をすべきかもしれないが，のちにも注記するように，あくまで日本経済史研究における消費の捉え方をどのように今以上に発展させられるのかという関心を上位においているためでもある。

（4） ヴェブレン著（小原敬士訳）『有閑階級の理論』岩波文庫，1961 年，28 頁。以下，原著ではなく，この翻訳書から引用する。筆者は日本経済史を専門としていることもあって，原著からの解釈ではない点で学説史分析としては不十分さを残しているうえ，ほかの研究者による新訳との対照を行っているわけでもない。とはいえ，前記の注と重複するが，あくまで日本経済史において消費を分析する視覚を洗練させるための作業を優先しているので，分析手続き上の不十分さを自覚しながらも，こうした方法で議論を先に進めたいと考えている。また，ヴェブレンの議論は難解なので，やや煩雑かもしれないが引用を多くして丁寧に議論を参照しながらその可能性と限界を論じておきたい。

（5） 前掲『有閑階級の理論』，47 頁，

（6） 以下，第三章「衒示的閑暇」，同上書。

（7）　以下，第四章「衒示的消費」，同上書。

（8）　同上書，84-85 頁。

（9）　この点は教育によって，世代を超えて再生産される価値感なのかもしれない。第十四章，同上書。以下，第五章「金銭上の生活態度」，同書。

(10)　同上書，102 頁。以下の引用も同じ。

(11)　同上書，107-108 頁。

(12)　以下，内容は，第六章「趣味の金銭的な基準」，同上書。

(13)　同上書，123 頁。ヴェブレンは，このことをスプーンの事例で説明している。すなわち，手作りの高価なスプーンが機械によって製造されたスプーンより使いやすいということは自明ではないという。同書，123-124 頁。そのうえで「スプーンのばあいは典型的である。金がかかった美術品と考えられる品物の使用や鑑賞からひき出される多くの満足感は，多くのばあい，おおむね美の名のもとにおおわれている高価という感覚の満足である。われわれがすぐれた品物を高く評価するのは，それがその品物の美しさの率直な評価であるよりももっとしばしば，そのすぐれた栄誉ある性質の評価であることが多い。衒示的浪費の要求は，普通，意識的には，われわれの趣味の基準のなかにはふくまれていないが，しかし，われわれの美の感覚を淘汰的に形成し，支持し，またいかなるものを美として正しくみとめることができ，いかなるものをみとめることができないかについてのわれわれの区別の指導原理となるようなひとつの拘束的な規範として，やはり存在している」と論じている。同書，125 頁。

(14)　同上書，161 頁。以下，第七章「金銭的文化の表示としての衣服」，同書。

(15)　同上書，167 頁。

(16)　同上書，167-168 頁。

(17)　こうしたある種の技術的合理性や後に触れる人間が備えている製作本能としてのなんらかの合理性が，有閑階級の特徴あるいは資本によってゆがめられるという論理展開は，後の著作にも反映されていると考えられる。T. ヴェブレン（小原敬士訳）『企業の理論』勁草書房，新装版，2002 年。

(18)　こうした閑暇状態の女性が，非差別的な社会行為を通じ道徳的な価値観を高める可能性が指摘されながらも，結局は，こうした行為も衒示的閑暇として見栄を競う動機づけを基礎としていることが論じられる。言い換えれば，女性の暇閑と非差別的な ── 道徳的なあるいは人間的な ── 営みが社会の安定化に貢献し得る論理を展開したが，ヴェブレンは，これも見栄をはる金銭的浪費によって淘汰される性格をもっており，紛れのない非差別的な行為ではないと指摘していた。とりわけ，第十三章「非差別的関心の残存」，前掲『有閑階級の理論』。こうした悲観的な見通しをいかに受け取めるのかについては，現在の社会問題を意識的に発見しながら，なおかつ実証的な研究を通じてわれわれが考えぬく姿勢に委ねられているのかもしれない。

(19)　同上書，91 頁。

(20)　二つ前の脚注，および第十三章「非差別的関心の残存」，同上書を参照。

(21)　同上書，92 頁。

(22)　同上書，92-93 頁。

(23)　同上書，第三章，第四章を参照。

(24)　以下，宇沢弘文『ヴェブレン』岩波書店，2000 年，54-55 頁。

(25)　同上書，55 頁。

(26)　アダム・スミス（大河内一男監訳）『国富論Ⅰ』中公文庫，第五章，1978 年。

(27)　マルクス（エンゲルス編・向坂逸郎訳）『資本論（一）』岩波文庫，1969 年。

(28)　マルクス著（城塚登・田中吉六訳）『経済学・哲学草稿』岩波文庫，1964 年。

(29)　こうした見方は，武田晴人『仕事と日本人』ちくま新書，2008 年，第 8 章。

(30) こうした見方は，マックス・ヴェーバー（大塚久雄・生松敬三訳）『宗教社会学論選』みすず書房，1972 年。

(31) 以下，マックス・ヴェーバー著（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫，1989 年。金銭的な余剰が消費ではなく再投資に向かうことを資本制社会が成立する条件として重視したものに，三和良一『概説日本経済史近現代［第 3 版］』東京大学出版会，2012 年がある。これに対して，小野塚知二『経済史』有斐閣，2018 年においては，欲望が成長の原動力とされる。もっとも小野塚においてもヴェーバーの勤勉性が近代化の原動力として重視されてはいる。ここでは詳しく触れないが，欲望と勤勉さとの評価をにらみながら，資本主義社会とそれがもたらす経済発展ないしは経済成長の仕組みを考察する課題が，なお重要であることがうかがえるであろう。この点については，『有閑階級の理論』の訳者であった小原敬士も付録の解説において，ヴェブレンとヴェーバーの近代化をめぐる論点の相違として提示していた。前掲『有閑階級の理論』，387-388 頁。

(32) 近代社会に対するヴェーバーの姿勢が，悲観的なものであるという解釈を強調したものとしては，山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書，1997 年などを参照。

(33) 働くこと以外にも，言葉の意味が時代とともにあることは他にも例があり，たとえば，良き人は，社会的階級の高い者を基本的には指したが，近代社会とともに返済が滞りなく信用供与に値する者へとわれわれの見方は異なっていったという。ニーチェ（木場深定訳）『道徳の系譜』岩波文庫，1964 年。

(34) 前掲『有閑階級の理論』，93 頁。

(35) 同上書，97-98 頁。

(36) 同上書，98-99 頁。

(37) のちの著作においてヴェブレンは，本能という言葉を客観的な目的を自覚的に追及する行動に対して用いており，動物的な反応は性向として区別している。そして製作本能は ── 訳者の松尾は「職人技本能」と翻訳するが ──，目的論活動の本能のなかでも，とりわけ手段を重視するものとされており，それは生活の手段や方法に関係づけられるものに近いと議論されている。人間社会を持続させる目的に適合的な活動が製作本能であるということが，より重要な論点として考察されていると考えられるが，のちのヴェブレンの思考を位置づけることは今後の課題としたい。T. ヴェブレン著（松尾博訳）『ヴェブレン経済的文明論 ── 職人技本能と産業技術の発展 ── 』ミネルヴァ書房，1997 年。

(38) 前掲『有閑階級の理論』，99 頁。

(39) 同上書，99 頁。

(40) 同上書，105-106 頁。

(41) ここでも，ものさしは高価であることが重要であって単なる差異化ではない点に留意されたい。この点はのちに本論で考察する。

(42) 以下，ジャン・ボードリヤール（今村仁司 & 塚原史訳）『消費社会と神話の構造』新装版，紀伊國屋書店，2015 年，14 頁および目次。ヴェブレンの議論の批判的考察と同様に，ここでもボードリヤールの研究全体を論じるような論考ではないので，学説史的な関心からすれば検討が不十分であるそしりを免れないと思われるが，こうした視点の限定性は ── 繰り返しではあるが ──，日本経済史の分析において消費を対象とする際の視点をどのように育むのかという関心が上位にあるためである。とはいえ，今後，ボードリヤールなどの現代社会に対する知見を批判的に乗り越えながら経済史分析を深める課題も残されていると思われるので，こうした議論の検討は今後の課題としたい。

(43) 以下，ガルブレイス（鈴木啓太郎訳）『豊かな社会』決定版，岩波現代文庫，2006 年，第 9 章，第 10 章。

(44) 前掲『消費社会と神話の構造』，95-109 頁。こうしたボードリヤールの評価は，ガルブレイスの『豊かな社会』だけではなく，『新しい産業国家』も対象としたものであった。

(45)　前掲『消費社会と神話の構造』，62-63 頁。

(46)　同上書，66-67 頁。

(47)　同上書，68 頁。以下の引用も同様。

(48)　同上書，103 頁。

(49)　同上書，79-80 頁。

(50)　同上書，81 頁。

(51)　同様の指摘は，同じく「第二部　消費の理論」の「3　個性化，あるいは最小限界差異」における「区別か順応か」という箇所においてもみられる。「消費というものは，まずはじめに個人的欲求をもった個人を中心に秩序づけられ，次いでこの欲求が権威ないし順応の要請に応じて集団の文脈の上に指数化される，といったものではないことを知るべきだ。実際には，まず最初に差異化の構造的論理が存在し，この論理が諸個人を「個性化された」ものとして，つまり互いに異なるものとして生産する。だがこのことは，自分を個性的なものとする行為においてさえも個々人が自分を順応させる一般的モデルとひとつのコードに従って行われる」，そして「別のいい方をすれば，順応とは地位の平等化や集団の意識的均質化（どの個人も一列に並ぶような）ではなくて，同じコードを共有すること，ある人びとを他の集団の人びとと区別する同じ記号を分かちあうことである」。ここではコードの共有として個人が集団化する可能性が論じられているが，記号の消費を，個人であれ，社会階層の集団の一員としてであれ，強制されてしまうことが重要というわけである。同上書，140-141 頁。

(52)　同上書，136 頁。

(53)　同上書，110 頁。

(54)　同上書，310 頁。以下，同じ。

(55)　同上書，321-328 頁。

(56)　同書，347 頁。

(57)　差異化を絶えず求め続ける記号の消費は，労働のみならず消費も主体的な喜びを実現する行為とみなされないことによって，ますます虚無的な世界観を提示することに結実することが予想される。最高の諸価値が無価値化される，しかも継続的に価値を喪失していくと読み解くこができるとすれば――記号の消費が価値ある行為とするのであれば別であるが，おそらくそうした意図ではないであろう――，これは，ニーチェのニヒリズムにも通底する議論でもある。さしあたり，ニーチェのニヒリズムについては，山崎庸佑『ニーチェ』講談社学術文庫，1996 年，Ⅰ-三。資本主義やシステムの拒絶がこのような事態への直面を余儀なくされるとすれば，ボードリヤールも期待したように，われわれは座して待つわけにもいかないのであろう。こうした関心について，アドルノは客観そのものの語りを受容することによって，交換を介した別様の同一化の地平が切り開かれるとしており，それは，言語や想像が生活世界の存立の限界においてその可能性の条件を問い返すことによって進められ，ハーバーマスともこの点では近似する局面があるという――もっともハーバーマスは生活世界内における了解の次元で行われる行為を重視している――。表弘一郎「フェアな世界内政か，システムの観察か――アドルノ，ハーバーマス，ルーマン――」長尾伸一・梅澤直樹・平野嘉孝・松嶋敦茂編著『現代経済学史の射程――パラダイムとウェルビーイング――』ミネルヴァ書房，2019 年。生活世界の限界と生活世界そのものとの違いを筆者が必ずしも理解しているわけではないが，疎外された社会関係を克服する何らかの可能性は，われわれの生活世界を基盤としながら導き出されるのかもしれない。

(58)　使用価値を効用と置き換えてしまうと，新古典派を支持する議論になってしまう可能性が予想されるが，これは今後の課題としたい。

(59)　たとえば，カール・マルクス（武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳）『経済学批判』岩波文庫，1956 年，序章。もっとも，経済史分析が，マルクスを前提としなければできないといいたいわ

けではまったくない。例えば，マルクスと対比したときのボードリヤールの議論の限界はどこにあるのか示したいがために対比しているだけである。

(60) 川北稔『洒落者たちのイギリス史 ── 騎士の国から紳士の国へ ──』平凡社ライブラリー，1993年，11-17頁。

(61) 同上書，18頁，43頁。

(62) 同上書，185頁。

(63) 同上書，Ⅱ章。ジェントリ層は自身が貴族的な装いをするために「贅沢禁止法」に反対したことがあったとされるものの，川北が重視したのは本文で紹介した論点であった。

(64) 同上書，206頁。

(65) 同上書，207-213頁。引用は，同書，207頁。

(66) また，バーナード・マンデヴィルが1714年に著した『蜂の寓話』で論じたような「贅沢や濫費こそが有効需要をふやし，経済や社会を活性化する特効薬」であるという趣旨は，表面的には強い反発を受けたものの「一八世紀初頭ごろには，わりあいひろく受けいれられるようになっていた」という。同上書，204頁。

(67) 同上書，255頁。

(68) 同上書，251-257頁。

(69) 以下，坂井妙子『メイド服とレインコート ── ブリティッシュファッションの誕生 ──』勁草書房，2019年，第五章。

(70) 以下，同上書，135頁。

(71) なぜ特定の財が消費の対象になるのかということを考察することの難しさを，ほかにも例示しておくと，たとえば，紅茶を消費する（飲む）習慣について，ポルトガルやオランダも紅茶の貿易に従事し王室などでは飲料として扱われたにもかかわらず，食文化として一定の定着をみたのはイギリスだけだったという。川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書，1996年，第五章。この点について川北は十分な説明をしていないが，消費する可能性は開かれていたにもかかわらず，特定の財が一定の地域だけで消費の対象となり続ける事態は，記号としての登録の有無によって説明されるのか，あるいは他の方法が有効なのか，いずれにせよどのように考察すればよいのかという方法上の問いかけでもある。

(72) アダム・スミス，前掲『国富論』にやはり端緒が認められるであろう。

(73) 歴史学の関心では時期区分を伴う時代の捉え方が一つには重要であろう。このような議論について，平易なものとしては，たとえば松沢裕作「時代 ── 時代を分けることと捉えること ──」井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作『大人のための社会科 ── 未来を語るために ──』有斐閣，2017年など。

(74) たとえば，武田晴人編『高度成長期の日本経済 ── 高成長実現の条件は何か ──』有斐閣，2011年。

(75) この点，資本市場の発展と帝国主義的な進出が論理的な因果関係に基づいて考察されたわけでは必ずしもないという議論とアナロジーをなしていると見えるかもしれない。武田晴人『異端の試み ── 日本経済史研究を読み解く ──』日本経済評論社，2017年，第13章。すなわち，資金が過剰化することまでは説明できたとしても，それがなぜ帝国主義的な投資に結び付くのかは自明ではないということである。この点については，武田晴人「はしがき」石井寛治・原朗・武田晴人『日本経済史3 両大戦間期』東京大学出版会，2002年をも参照。

(76) また，ボードリヤールのシステムは何を指すのか明瞭ではないという疑問点も浮かび上がる。石井晋の議論を応用すれば，資本の再生産にかかわる仕組みとそれを支える制度的な支柱などとなるのかもしれない。石井晋「生産性上昇と有効需要 ── 経済成長論から構造分析へ ──」武田晴人・石井

晋・池元有一編著『日本経済の構造と変遷』日本経済評論社，2018 年。もしそのように置き換えが可能であれば，石井が指摘するように，資本の再生産の仕組みは，なんらかの意味ある使用価値を伴う商品の提供を保証するものでは必ずしもないし，その反対でもない。つまり，安定的な資本の再生産の仕組みが登場したとしても，そのことが経済発展や経済成長，あるいは人類の物質的な豊かさや精神的な充足，さらには環境破壊を必然的に伴うとは論理的に説明するものではない。しかし，資本の再生産の仕組みがあったとして，これは人間が動かしていることに変わりはない。そうだとすれば，意味のある仕組みに変えることは不可能ではない。そのためには構造的な分析に視野を及ぼす必要がある。

(77)　河村徳士，前掲論文「消費をめぐる議論の意義と音楽産業分析の可能性」。

(78)　満薗勇『日本型大衆消費社会への胎動 ── 戦前期日本の通信販売と月賦販売 ──』東京大学出版会，2014 年。

(79)　もっとも，抽象的欲望，具体的欲望という概念設定は，石原武政『マーケティング競争の構造』千倉書房，1982 年に満薗が依拠したものである。

(80)　こうした満薗の議論は，これまで繊維品の製造方法について，市場との接点が近い商人の判断が流行のとりいれなどの観点において重要であったことが示唆されながらも（谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会，1998 年，橋口勝利『近代日本の地域工業化と下請制』京都大学学術出版会，2017 年），これらの点の議論が必ずしも進まなかったことに対して商人と消費者とが接する具体的なあり方を方法論的にとらえようとした点においても新しさがあったと思われる。玩具を事例とした谷本の研究も同様に商品企画力をもった問屋や小規模業者の役割が重視されているが，消費者との接合は必ずしも明らかではなかった。谷本雅之「分散型生産組織の「新展開」── 戦間期日本の玩具工業 ──」岡崎哲二編『生産組織の経済史』東京大学出版会，2005 年。

(81)　中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館，2018 年。こうした議論の萌芽は，中西聡「文明開化と民衆生活」石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 1 幕末維新期』東京大学出版会，2000 年にみられる。

(82)　ペネロピ・フランクス，ジャネット・ハンター（中村尚史・谷本雅之監訳）『歴史のなかの消費者 ── 日本における消費と暮らし 1850-2000 ──』法政大学出版局，2016 年など。

(83)　もっとも，モダニティパラダイムが抽象的欲望のレベルで展開したとしても，大衆と呼べるような大きな市場が形成される所得上昇の課題がいかに克服されたのか，あるいは戦前期の所得上昇の限界をどのように位置づけるのかという批判がある。武田晴人「書評　満薗勇『日本型大衆消費社会への胎動 ── 戦前期日本の通信販売と月賦販売 ──』」『歴史学研究』953 号，2017 年，同『日本経済史』有斐閣，2019 年，208 頁。また，やや欠如論的な批判であるが，のちに本論でも示唆するように，抽象的欲望が具体的な財やサービスを求めたとしても，それらを供給できたのかどうかという生産力の課題検討も十分ではない。この点，新しい生活への渇望が描かれながらも，具体化の距離が遠いことをどのように考えるのか議論の余地はある。たとえば，中流のあり方の変化を論じた久井の研究においても中流の希望が手の届く夢であったのかどうか議論の余地は大きい。久井英輔『近代日本の生活改善運動と＜中流＞の変容 ── 社会教育の対象／主体への認識をめぐる歴史的考察 ──』学文社，2019 年。

(84)　この点の指摘は，さしあたり武田晴人「序章　日本の高成長経済」武田晴人編前掲『高度成長期の日本経済 ── 高成長実現の条件は何か ──』。ただし，個性的な消費の開花という点については，満薗あるいは石原の言葉を借りれば，抽象的な欲望のあり方がいかに具体的な欲望を実現しているのかといった視点から，実証的に検証する余地は残されていると思われる。

(85)　念のために，断っておけば，満薗がボードリヤール批判をしているわけではない。

(86)　この点，近年の高嶋修一氏の議論にも通底するところがあるのではないだろうか。同『都市鉄道の

技術社会史』山川出版社，2019 年。

(87) 近年の満薗の議論も，やや言説分析に近いというか，なぜ人々がある価値観にからめとられるのか必ずしも明示的ではないようにも感じられる。高度成長期における「かしこい消費者」の出現は，どのようにして誕生したのであろうか。満薗勇「「かしこい消費者」の成立史をめぐって ── 割賦販売を手がかりに ──」『歴史と経済』第 243 号，2019 年。またイギリス経済史においても消費を議論する際には，ある時代における一定の雰囲気を読み取るような手法が採用されているように思われるが，同様の難点を抱えていると指摘できるかもしれない。フランク・トレントマン（田中裕介訳・新広記解説）『フリートレイド・ネイション ── イギリス自由貿易の興亡と消費文化 ──』NTT 出版，2016 年。

(88) 第三の点については，すでに若干の指摘を行ったことがある。河村徳士，前掲論文「消費をめぐる議論の意義と音楽産業分析の可能性」。

(89) やはり，消費の分析に加えて，生産のあり方，あるいは産業史分析を通じた産業構成の変化や，この点の考察を通じた資本主義の変質の方向性を見定めることが重要であることは，次のようなアナロジーによっても説明できるかもしれない。すなわち，供給サイドあるいは生産活動の展開過程を看過してよいわけではないということであるが，かつて向坂逸郎は，谷崎潤一郎の小説を援用して，子供たちが自宅や方々から品物を手にしてやってきて交換に興じている姿は経済活動なのか否かと問いかけた。そのうえで，やはりこうした財がどこからきたのか，そしてどのようにして生まれてきたのかを考察する必要があると論じ資本論の意義を考察した。市場を介した交換の様子を描けば，経済活動が説明できるわけではないのである。向坂逸郎『資本論入門』岩波新書，1967 年。

(90) 安定成長期の見通しについては，さしあたり，橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭・齊藤直著『現代日本経済論〔第 3 版〕』有斐閣アルマ，2011 年。

(91) 情報通信産業の発展については，武田晴人編『日本の情報通信産業史 ── 2 つの世界から 1 つの世界へ ──』有斐閣，2011 年。情報通信産業の発展を支えた日本の電子工業は，これまでの通説であった企業間競争を介したそれぞれの企業の努力によって技術開発，新製品の提供，製造過程の合理化が試みられ発展をみただけではなく，試験研究における産業政策の役割も重要であったことを試論的に指摘したものとして，河村徳士「日本における産業政策の役割 ── 機械工業と電子工業 ──」武田晴人・林采成編『歴史としての高成長 ── 東アジアの経験 ──』京都大学学術出版会，2019 年がある。

(92) 藤本隆宏『日本のもの造り哲学』日本経済新聞社，2004 年などのほか，マイケル. J. ピオリ／チャールズ. F. セーブル（山之内靖／永易浩一／菅山あつみ訳）『第二の産業分水嶺』ちくま学芸文庫，2016 年。

(93) サービス産業は，固定資本というより人的資源への投資が重要となることが予想され，こうした角度からもさらなるサービス産業の発展が進むだろう。

(94) 産業構成のサービス化と生産性上昇の課題については，森川正之『サービス立国論 ── 成熟経済を活性化するフロンティア ──』日本経済新聞社，2016 年。

(95) 前掲『消費社会の神話と構造』，275-306 頁。

(96) こうした見通しについては，たとえば，呂寅満も，これからの産業史分析においては，欲望充足という観点からこれまでの成長メカニズムの解明に徹してきた方法も，「幸福・生活」といったものさしに代わり得るとし，サービス産業や消費に注目が集まるのではないかと指摘している。同「産業史研究の意義と方法」前掲『日本経済の構造と変遷』。

(97) たとえば，前掲『歴史のなかの消費者 ── 日本における消費と暮らし 1850-2000 ──』は，これまでの日本経済史研究が，消費を看過してきたとした批判に立脚して進められた考察であった。

(98) サービス産業が経済成長といった分析概念にはなじまないことについては，武田晴人『脱・成長神話』朝日新書，2014 年。サービス産業を分析するためには，新しいものさしを創造する必要がある

ことを示唆したものとしては，河村徳士「産業構成のサービス化とわれわれの課題」『独立行政法人経済産業研究所　新春特別コラム 2020 年の日本経済を読む web 版』，2020 年。https://www.rieti.go.jp/jp/columns/s20_0016.html。また，工業社会の次に訪れた情報通信産業の発展を背景としたポスト工業社会においては，社会的なつながりを消費する事態が生まれ経済成長が相対化される可能性が浮上するとはいえ，失業の恐怖から抜け出せないわれわれは，結局，経済成長を求めてしまうという。ダニエル・コーエン（林昌宏訳）『経済成長という呪い ── 欲望と進歩の人類史 ──』東洋経済新報社，2017 年。社会的なつながりを理解し経済成長を相対化する問題意識からもサービス産業の捉えなおしが課題になるのかもしれない。

(99)　若干，付記しておくと，消費のメニューが後戻りや再び登場することを繰り返すことは ── ボードリヤール風に表現すれば，記号として登録を繰り返す様子は ──，ある段階の時代を行きつ戻りつしながら次の時代への変化を醸成するような事態と捉えることもできるかもしれない。段階論を継承しながらも，ある時代像のなかで後戻りを認める方法は，遷移という概念でとらえられることが指摘されていると考えられる。この点については，武田晴人，前掲論文「序章　日本の高成長経済」。ただし，そのような事態を想定できるとしても，時代をとらえるものさしをわれわれは用意していかなければならず，そのためには，やはり消費をめぐる研究で得られた知見を踏まえて，さらに産業構成の変化を，産業史分析の蓄積を活かしながらとらえ，時代像の把握を帰納的な方法で把握することによって，実証的な考察を進展させるしかないと考えられる。

主要参考文献

アダム・スミス（大河内一男監訳）『国富論 I』中公文庫，1978 年

石井晋「生産性上昇と有効需要 ── 経済成長論から構造分析へ ──」武田晴人・石井晋・池元有一編著『日本経済の構造と変遷』日本経済評論社，2018 年

宇沢弘文『ヴェブレン』岩波書店，2000 年

ヴェブレン著（小原敬士訳）『有閑階級の理論』岩波文庫，1961 年

小野塚知二『経済史』有斐閣，2018 年

表弘一郎「フェアな世界内政か，システムの観察か ── アドルノ，ハーバーマス，ルーマン ──」長尾伸一・梅澤直樹・平野嘉孝・松嶋敦茂編著『現代経済学史の射程 ── パラダイムとウェルビーイング ──』ミネルヴァ書房，2019 年

カール・マルクス（武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳）『経済学批判』岩波文庫，1956 年

川北稔『洒落者たちのイギリス史 ── 騎士の国から紳士の国へ ──』平凡社ライブラリー，1993 年

川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書，1996 年

河村徳士「消費をめぐる議論の意義と音楽産業分析の可能性」『城西大学経済経営紀要』第 37 巻（通巻第 42 巻），2019 年

河村徳士「日本における産業政策の役割 ── 機械工業と電子工業 ──」武田晴人・林采成編『歴史としての高成長 ── 東アジアの経験 ──』京都大学学術出版会，2019 年

河村徳士「産業構成のサービス化とわれわれの課題」『独立行政法人経済産業研究所　新春特別コラム 2020 年の日本経済を読む web 版』，2020 年，https://www.rieti.go.jp/jp/columns/s20_0016.html

ガルブレイス（鈴木啓太郎訳）『豊かな社会』決定版，岩波現代文庫，2006 年

坂井妙子『メイド服とレインコート ── ブリティッシュファッションの誕生 ──』勁草書房，2019 年

向坂逸郎『資本論入門』岩波新書，1967 年

ジャン・ボードリヤール（今村仁司 & 塚原史訳）『消費社会と神話の構造』新装版，紀伊國屋書店，2015 年

T. ヴェブレン著（松尾博訳）『ヴェブレン経済的文明論 ── 職人技本能と産業技術の発展 ──』ミネル

ヴァ書房，1997 年
T. ヴェブレン（小原敬士訳）『企業の理論』勁草書房，新装版，2002 年
高嶋修一『都市鉄道の技術社会史』山川出版社，2019 年
武田晴人「はしがき」石井寛治・原朗・武田晴人『日本経済史 3 両大戦間期』東京大学出版会，2002 年
武田晴人編『日本の情報通信産業史 ── 2 つの世界から 1 つの世界へ ──』有斐閣，2011 年
武田晴人「序章　日本の高成長経済」武田晴人編『高度成長期の日本経済 ── 高成長実現の条件は何か ──』有斐閣，2011 年
武田晴人『脱・成長神話』朝日新書，2014 年
武田晴人『異端の試み ── 日本経済史研究を読み解く ──』日本経済評論社，2017 年
ダニエル・コーエン（林昌宏訳）『経済成長という呪い ── 欲望と進歩の人類史 ──』東洋経済新報社，2017 年
谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会，1998 年
谷本雅之「分散型生産組織の「新展開」── 戦間期日本の玩具工業 ── 」岡崎哲二編『生産組織の経済史』東京大学出版会，2005 年
中西聡「文明開化と民衆生活」石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 1 幕末維新期』東京大学出版会，2000 年
中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館，2018 年
ニーチェ（木場深定訳）『道徳の系譜』岩波文庫，1964 年
橋口勝利『近代日本の地域工業化と下請制』京都大学学術出版会，2017 年
橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭・齊藤直著『現代日本経済論〔第 3 版〕』有斐閣アルマ，2011 年
久井英輔『近代日本の生活改善運動と〈中流〉の変容 ── 社会教育の対象／主体への認識をめぐる歴史的考察 ──』学文社，2019 年
藤本隆宏『日本のもの造り哲学』日本経済新聞社，2004 年
フランク・トレントマン（田中裕介訳・新広記解説）『フリートレイド・ネイション ── イギリス自由貿易の興亡と消費文化 ──』NTT 出版，2016 年
ペネロピ・フランクス，ジャネット・ハンター（中村尚史・谷本雅之監訳）『歴史のなかの消費者 ── 日本における消費と暮らし 1850-2000 ──』法政大学出版局，2016 年
マイケル. J. ピオリ／チャールズ .F. セーブル（山之内靖／永易浩一／菅山あつみ訳）『第二の産業分水嶺』ちくま学芸文庫，2016 年
マックス・ヴェーバー（大塚久雄・生松敬三訳）『宗教社会学論選』みすず書房，1972 年
マックス・ヴェーバー著（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫，1989 年
松沢裕作「時代 ── 時代を分けることと捉えること ── 」井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作『大人のための社会科 ── 未来を語るために ──』有斐閣，2017 年
マルクス著（城塚登・田中吉六訳）『経済学・哲学草稿』岩波文庫，1964 年
マルクス（エンゲルス編・向坂逸郎訳）『資本論（一）』岩波文庫，1969 年
満薗勇『日本型大衆消費社会への胎動 ── 戦前期日本の通信販売と月賦販売 ──』東京大学出版会，2014 年
満薗勇「「かしこい消費者」の成立史をめぐって ── 割賦販売を手がかりに ── 」『歴史と経済』第 243 号，2019 年
三和良一『概説日本経済史近現代［第 3 版］』東京大学出版会，2012 年
森川正之『サービス立国論 ── 成熟経済を活性化するフロンティア ──』日本経済新聞社，2016 年
呂寅満「産業史研究の意義と方法」前掲『日本経済の構造と変遷』，2018 年

山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書，1997 年
山崎庸佑『ニーチェ』講談社学術文庫，1996 年

Some Consideration on the Perspective of Japanese Economic History Studies on Consumption

― Veblen and Baudrillard as Reference Axes ―

Satoshi KAWAMURA

Abstract

The purpose of this paper is to seek a new perspective on Veblen and Baudrillard as a reference axis for the interests related to consumption, which have been studied in the field of Japanese economic history in recent years. The discussion explaining the rise in consumption has evolved from focusing on being expensive to consuming symbols that require differentiation. However, the debate over the consumption of symbols was not based on historical interest. It is important to consider the characteristics of an era where individual consumption develops in the high growth period and the subsequent era. Nevertheless, it is not possible to think of the whole picture of the era only for consumption. It will be important to understand the characteristics of the service industry that works directly with others, as well as the strategies of companies that create demand. The analysis of the industrial history of the service industry is an issue for the future.